(清) 809-3

俳諧資料カード

年代	文化6
編者(筆者)	
書名	会改後 上
備考	

(下垣内蔵)

〒737
下蒲刈町大字下蒲刈島三七一六
下蒲刈町
内和人

さいつころ西のおくうつりするをみてこちらし
いひそ――きくもせるるしをちのくちい葉あるく
――ゝ式あつめて七枝よりそろ三つよりそろて雪も
七郎一葉くくちふいろ――へうをたを松葉の
庵く世そをてはうへくるをつつのをよん似る
へくもあるねとなくのゝすいハちよのねそろ乃
ゑ葉うをへてもえすそいろの雪葉ハいよの陽
そをのめそもつるをもつををこにのあ――乃葉
うをちうちあるをものハこそもあるをもをうくさ
ハふをいうハのつくうるさくしハ梓園のむう――よ
をありやち――やいうすうるてくおの私あげ

うををこれこうみをせ私をせ庵うつちひう
そくるをおうをへまあ――ゐ――や

ちぬろうろ人高阿る海うちの
花をくうみ――るす

跡梅序

いにしへの人の探梅いつのころよりいひそめしことを仕初てはるさよ八百八うの小雪をおもふ人ゆゑうき春てふのふくろそこともいさすかくれうをるす度をさなうてつひよ俳の祝いつよ成ぬ今八五畿内乃歌よしの雪八めろう景――ついてゆう――るおくを人ことてみするを見れてもあおゆよ宮おりてあき――春の曙ゆめのく鹿よ行冷――しるる秋のタて乃所くの梢も時う男らうはそ――里再よ春をるる白しるても拾てろう――賀梅志ことちろくろうをうを世上ようくむくそこれ探志の先る元う序をこう附の地徳ちり文化亡の年まきはうき初八ゐる維摩斉居善

俳諧春之部

旅人とわが名よばれん初の花　芭蕉
山のひくみよりぬるよどう鳴　鷺白
四五面の双よ夢のつゝめて　風吟
近江八景の人をとゞめて　外海
憂をはら鉛よも月のさしうり　八竜
猿つく、なふ音こうちする　秋
白菊のいろ一ついよ咲そぐ　杉菊
下駄をならべる泡泉のに　雨柳
ウおつうらと判の店うる状の名　虫眞
春の梢のあてうをおしくたむ　鬼圭
　　草依

いくたびやくらをれ城町ふすみて　花之
咲ぬ牡丹乃雪よ一かるく　方水
溝へ足をおくほとゆけハ郡山　二泉
綿の上を牧うきをるよ　有　可省
秋風を鮎のうろこまでおもふらく　二葵
萩の活うりなる法ゐ　二園
ふしうるぬ京頼ら狩のこりやう　白
長座妹をる　の江山　岡
朝ふとのあさへよくむさのむて　天馬
あちこちあるくなハいくくらく　秋雫
夏もる急りうちの妻の花　湖
浦の庵までみをしせ三　有　收

学ぶ　まうけ　張鴉
あるじをなうおそぎ摘ゐ足　左禽
入しらぬ宝の山吹咲　て　杜に
流し車をつくるをみら木　来紀
垂ぬを入除までものとうきう　禽
五条のうひとうもの名を写　翅
う喰滅のからうくつく雨降て　紀
牧よすゑる冬のきうる　仁
隈うう除庵のまゝ吟といふ　鴉
秘蔵の名を放す　神　雲　禽

ちらしと潮来の灯を押うつり　に　紀
待てともなき暮のすゝ〳〵ち　舎
秋いへちらしのあちらのけし家て　舎
姫や雁のともえらいする　舎　紀
宮免なちらしの四ツ舟のよし　紀
くハつと花火をちらす松ケ　に
浦土のあと引ふ笠のみちしを　舎
人のするむ砂ぬうつちゝ　舎
おろしの音ゝうつをおろしこめ　に
聖ハ茶入をこするの約束　紀
むる井の君とちりハゞゝり　舎
舟ちゝしるこ宵のとよめち　駕

ちろ〳〵と山のむくらり神鳴て　紀
改痛やむとて活せぬちり　に
古ぬかあふうやまりし角笈を　駕
鳥のこ陰よてり降のみ　舎
茶つきをよしと云てハみ森ゝ　に
屋来ぬよゝち待の月　紀
鰯する浦の波らせあら次て　舎
秋のあとなきをとりの峰　舎
ゑをてむ人ふみするやへ薄　紀
笠のうち七苔の——ゝゝり　に
まれひくまちひさ表見を居て来て　舎
桶のつくみもつゝ抱　煤　舎

花さそふ泊瀬のびーはやくるく　口
劍のもりもうらこう弐　春　紀

渡鴈　左舍　杜口　采花

各九句

うくひすは西なみちろてを音外　比良
春もろこてる松のちり　掃　奇渕
ころ柿のついころがるもめでとくて　仝
するともなく兎を待氷　良
あきしていくよもてらす山のく　仝
ゑくりよ出る春——も　渕
うし洗米のあとをおも粥の中　仝

傘ろりふまくる大連　良
ともかくも恋のうつゝぬ夢の詞　仝
うつゝの中うつゝ発をひきする　渕
行燈乃あつちのつらぬ恋ふ歩て　仝
半夜白をこやす　白雨　良
陽寸るハ文戒すめてうへろう弁　仝
老ぬ者そろりそのを冷ふ月　渕
蜘蛛もおくるさるハ不便てて　仝
ぬるでりくちのろの淋さ　良
花のさく哀を思へもいそうく　仝
砺ち土こ祝るろみろふの中　渕

二きちぎハゆくえんくま酔の句

烏帽子の蔵を人みゆつゝて　泣
耳なし山といふさへきゝなれぬ　人
情もつ――とおろす行の笋　涸
そそさいふおもかけもうりる氣ふ　人
雨のまるまで萩もそれそう　涸
多庵は酒――なそそふ永ふえて　仝
浪乃うゝり――消息をとく　人
朝うちも居ねみるくせの市の出　涸
そ――や葦も咲人帰き　凡　人
名ゝく八氣出乃社乃松のそよ　涸
ひやつく宿ふ　鱠ゆでるく礼　人
三うの旅おきそ――紀をもつふとて　仝

己巳一番乃――　砧きく　出す　涸
金人乃永遠まつくる旅とそう　仝
笠ぬとおりく　猫の衣さ　人
さひ――さや花乃あ――くの智恵軒吟仝
春のむら――の無をつぎさす　執筆
比良　九句　辛の涸　十七、二津人九、
執筆　一、

かゝるみちいつて結ぶ蔵の穂　李杏
頼ゐもて来をまねんちよ吉　鷲水
染上――絞みちらきに有て　杏
こゝろ迄拵も神ふとうりん事　水

いさよひの下戸ばえうふ夜寒かな　杏
ひとつ食ふ舟もまことや旅ぬう　お
菜枕蒲団ひとつ松地虫　尚
掛絵やうれもの寒礼　杏
卯やしと茶を呑みる人の恋　お
なをこころのうこくみ　飛　杏
雷乃ならぬおうら投扇て　お
序先の滝の懸るもるう　杏
いうめ時篭の鶉乃鳴るる　お
きもちとゆだ菊の庭　杏
枝折ふ汁乃さめる秋のう　お
孫乃大字を伺ねも出す　杏

おきしと花へしおてくれるなり　お
くふゝ菜好のきりんまき　杏
二孫もとも朝乃うちうちうち夜　尚
なもまぐれぬ序辛　海の砂　お
柿木なうるるる杉もみ杉て　杏
さうりとくる屋の名　お
式葬よみもれ出ふ　村のもの　杏
盃ふうさまハこうふ　橙　お
つちうり笹の柴なよれうり　杏
いくうきつてもす尚ふおもる　お
食時よもてつりぬ山の裾　杏
おきひて秋のねさへとてく緑　お

杏
ゐ
杏
ゐ
杏
ゐ
杏
ゐ

をうしの妻ゐ
みこけ出して
我宿ハ杉の木
こらひ鳥乃ゐ
そらやうて鴨鷗
原氏さんる
よのひら松
草乃うみ

李杏 名十八首

山里ゐふらく霞て小雨ゐる
春さうしゐ

其花
和山

杏乃枝ゐ
ゝゝゐゐ
秋さゝハ統の料理
緒——ても居を拵る

斉渕
山
渕
岸
岸
岸
仝
仝
仝

不乃ゐる境ゐう宇治ゐる
ゐのゐいまおるゝゝの
学乃ゐをうごゐ二三日
ゝゝふあうりをゐす
垣ゐのゝゝゐ妻の夜のゐて
行軽乃枝をいうしとふく

竹植ゑまあらつくたうりなり　山
洞をうるとて法談へゆく　就
笠なとなをらせて来て峰と家　宏
うをりのつるる庭の川には　習
行業よきおふの滝乃　栖つきの　禽
年時る竜あ年主るの庵北　口
秋雪のふしきつくる屋の壱　村
郭うるるし此居ういつたり　報
泪ふくみりを禁史みうちを共に　智
経木おくりてうへる私竜　桃
月夕ふふ花うりし花美義　仏
秋のみゆる笠泊着う、庵　山

いつとてもんふうぬ笠居て　談
椒乃房をひろひこむ　禽　窗
うちつるを軽症の内氏ち　習
法るうつりを称む　秋　花　禽
暮うみる庭のゆとりをよまる　口
妻をおよごすあめうりの笠　村

た禽に句　杜口に、　を村に、
来乾三、　縫智三、　貫秋三、
井仏三、　危山三、　梅我三、
害宏三、　時智三、

春の海、扇て船を押出す　蝉去

路乃そらの光る夜（夜）きは　米報
そぐらの辛夷の咲た斗こそえて　玄蛙
屋根のそらを渡す雲おも穏　奇洲
うんうりとなつて有まて秋の来　耘友
面白うない萩刈記され　友
笹の葉のそよ〳〵ぬるく吹　洲
ぬるとみゆる旅のそら　蛙
傘一とほし帳なるつゆの日　友
待ねふなれたき響も来ぬ　洲
なのてしことを百合ねの中の船一ぱ　日
笠をつて〳〵酒をうて〳〵　友
山面〳〵ふのうつりめなおさし　日

保ちうりと春のふる〳〵　洲
かな狐八蝦のをうを表う　日
鮮の酢ふも通る　鏡友
春宵そ花木の花もうるおいて　日
雨の〳〵里ふまつる水音　洲

一えへのきにきよきる有おろ　奇洲
山もすそのもうれ梅の風　遊春
酒納をこ妻のすゝひふ色う〳〵て　日
雀まつとてひつそりとする　洲
大せいふ箕乃納をを安こるし　日

楊うくるかとぼ　この流る　爽
うあぢさゐや夜のあるるうらうら　日
いく夜ねうハうきを忘ふちる　涸
一すぢの糸ゆ似るをもなし　爽
おハの鳴戸のしおのうらくて　涸
乙るをゆくへもまつするへる心　亜
未通きさ学ぶの奉ら　涸
あちこちと延引する春のうけ　春
鯨の逸——釜の焙梅　涸
小田は涙よんの雨あくしと　晉
西ゆふぐ涼のざこっ記　涸
文山の花をきれいみ吸ゆ——　爽

手て強くる爽のあらゆ——　涸

朝寒する内ふもつみてうへる屋　亦の涸
霞なうるゆおるいきり史　二道
人くめてていさとうの暗うて　二蜂
馬はうるいのこちらくるし　日
あくう——北鳥帽るようつる言の方　多
秋くる風ちう——ろうふく　日
うさくしとて八ちうる岸の花　鶯
こゆ——雲ふ・敢ふ　跨きく　多
大せいとうえうる人をふ去て　岐

末の栞乃ふみ

乱の雨を
捨みまて答せまし

とおりし切蝶を
やくそくの戸ハあいてみる
諸白よえふても君ら代をうら

蝶を
すゝ

ちあまる行の五
川上をすへてゝ

きのよふ

蝶を
相の栞をゝゝゝみゆく
花もれハ隈へゝす五外綱

蝶を
栗焼あハむゝゝゝゝ

を
何ゝも乱乃名ゆのをふゝん

仝
うけこんておくゝそのおゝ

蝶を
栞栞をゝせゝゝ雨ゝ隈

山茶花さけも梅も咲ゝゝ

蝶を
乾るのさゝ暗ふまる翁の隙
赤の仏をゝゝ十三

蝶
小便のゝぐさをこはる菊待

迄
月乃くまゝふみ松あてゞふ

蝶を
きゝしすまめなゝぬんうゝてゝ

乃
蔦牡露しゝ寄る隈て

蝶を
猿ゝきゝゝゝも居をその上

乃
筒ゝゝあゝゝる打ゝせの壱

蝶
二名仏をまゝゝてゝる山ほゝ

乃
鳴ゝぬゝゝてゝんこ者をを

蝶
ゝゝをゝゝ竹の粒ふ活ゝゝて
仝

寄礼の雪よりけうとめくつ　乃
み〳〵の花のさそらそ哀なる　仝
ちら〳〵うつく春の入あ　繁幸

寄渕一百　二道十七、　二蜂十七、
執筆一、

正月廿五日　霞堤

正月をあらうけみせる木芽哉
鴈うるいつの朝ゟすみそつ　文鳥
名る鴨の流るゝくハきえて　玄性
ゆく〳〵しと幕を引する　寄渕
いきたいハ人をついるのかのろく　東平

椽乃しくみまこなろきのとぶ　方水
ウ笠の茶ゐさそう　紀従雨
ところみて〳〵やよ雪のつれ指　楼
ひつくる波の中〳〵のあとこころ　渕
なの茅ふみちる　楊枝　楼
枝ゟの干られうきくまたる　水
ひえれ茶のうとく出笑　平
汉山ふ咲ハ桔梗も高うたり　楼
紅の跡を雪の涼い月代　多
麿審ふ二人ゟ賢をつきあを　楼
昆布〳〵ゟ味ありうり　渕
たく〳〵ふ降をのかる社の花　子

捵のこつらふをなかす 泓雪 水
二学ぶ妙のつつら帰を見吹て 井眉
名道のあらうハさき業をする 墟
むら雨の拍をく望を清て 泓
りつてくいもぬをか指う 傾 眉
とのし火の消ぬうちみもみへ 墟
就田乃文をあらす 集 泓
風のそよし風る居るかうて 眉
塔乃まぐりふ臼のよごろく 墟
いくなもるの使をふる 泓
鶴は名さへ和るうりけ里 眉
二里ぐらり舟のぐれつくるの舟 墟

咽のうこ玄のうくる 梅つ 淵
さひーさの境ハいつも内さいて 眉
うさてもうぬ恵を傾雪ち 墟
至るふ音のさえて来る玄のる 泓
石の一一めりのきにうきうこ 眉
宮つての花うさらふ咲おくれ 墟
約縄の中へつうる 蛤 泓
霞墟れる 久る三、 宝恒三、
斎泓れ、 東平三、 方水三、
井眉七

月うみのち一めを相の答ふ 方水

巣のとくなひぬるよおく雪　玄蛙
山とくしあらき薪を茹あけて　奇淵
ずいとさだのあ　とうふゆく　水
白き乃ごらをまの宮よ弥　蛙
むくひの菊をそそふちくらく　淵
鶫（つぐみ）うけの夜もろへくらぬ秋のまて　水
鞍馬乃舟をこぐこ　ハお多　蛙
宮をものく戸のもーらぬもくく　淵
孫もさきとち多美草う里う色　水
栗の末う二本生是ハ垣う出来　蛙
雨の小ふりふうこく栄　楊　淵
多造作よつごう里とのひもくれくう　水

榊ふなくへて味噌をつくる　地　淵
浪人のふやうふちる家の風　可省
迫つゐてある壬生の御（オン）切（キリ）　水
ふたとこも端（ミツキ）末も花のこぐひまて　蛙
蛾のうをふもちらぬあと雪　淵

鼈宝無行

よふふる時けハ浅氣も物さくう　可省
山のうすみよ混すひを袋　来紀
杖壱のくをむ行すう変て　其箇
大事一の人の通る朝の石　斎淵
猫舟のあらふよ雪のとふるく　紀

松葉をちらすあらし一さむう　省
二人――てほろほろまる墓の水　洲
雀いる――ていそぐ食　時　笛
稲舟をあらそべとてくる堀の外　省
秋の日うと松林のはうつ　記
ひやひやとするとおもへい暮の月　笛
旅のつかれをとりまいてゐる　洲
よい鐏の盃ますよそみし　記
髪のあるのうきる　風　省
五六束柴をくゝれば時ちどり　洲
法界もの発ごんとつく　笛
花さけい暮西あらしの人ふ集　省

似我のんをこえとゝみてを　記
十山鳥乃息もゝ春もこゝろ神　笛
苦ちまて撰らす　粧を日の米　洲
拇の木のおゝ――比もそのそひ　記
女子厄の――めるこゝち　芸　省
上京ハゝのうれる秋の雲　洲
障るゝてもうつる稲つ方　笛
七夕の扨ホ月のある沙法もなし　省
餞うるそのよるをあつかる　記
うーろろ勝手の宿ハすーそ　笛
あやめくさ刈花ちゝ水　洲
変きまてみ判をそえる上のう　記

一すす油を人のこいう　省
さう　七つう湯つぶのやうもーるるく　淵
奢う暗るとてたゞげる木の端　綿
仏前のくみふ鉦のあとをつけ　省
ぬり抽通す山吹の中　桃
鞦韆のおそひいたるむすめ哉　笛
雲乃前つく春風のそう　淵

可省　来秋　其笛　奇淵
各五句

松雨亭
玄関なき椿哉一く初さう　奇淵

座根ふきくへて多き雀よ　二松
元市景どこうら(ダエ)松上こ条　二蜂
春の投日をねをう名て出る　二泉
方かしの見うらびろく治宇よて　二道
こうくいそのこうける庁へう　季冬
昔うう教乃へこる佐伯よの　二窓
入札うて立る嫁の渋合　二園
こうー大ふうるくもまるるの色　松
川のむうふみこの　北　琢
猪擲こうの駕うこうきて　泉
伺のていいくき借うねこと　道
蛙蝌うちぬまて月をうちみあ　々

るまろうるき蜀黍の
猟師のつめこき秋と朱みうり
仔鹿の小鍋を買て帰るなり 松柏
ゆふべて居れハ妻来る 猿蓑
四月ぬくみうら路鶴うごつ
ゆく春や谷はつうちのもし 二
菜呑するとて花の出し哉 元
ゆつさうとひろめうる相油 宝
妻う降て半をひうする 園
戦のゐろうる衣裁咲て 松柏
双きり出す山の夕 蓼太
白なみうんみうり売うる永と 泉

人のこぞうう秋の田の鮒 乃
我木をつゞでもうぬへう車 元
そのお引うる 萩 侍 宝
夕べの花ハすけなき暮哨分 園
おとうるるハ水鉢ちうう 松
うつうりうしてみるるしぐ夜 蓼太
北堂へうゐる膳ハうるし 泉
えうそのく晒もめんハさたよく 乃
ういとつて出るセ花いくい 元
秋花みさきむうのえる海の底 宝
這ぎれよものなる 仍光 園

鍾旭の亜小

みよ中に孔叡を友ふ花ふ——て月居
るおとろぬ草——の　陽冬　遥春
一の銀二のひな舟ようう——ろう　稲丸
末戸をあらよきくよ一壱　日
まくしく発ふろう——初鰺　春
山ろう山へ　朝の雨　めろ　日
り町のうち流るく水のこくして　丸
思ひもすらぬ三輪の近うち　亜
伝るを被なろよ注人そ　丸

又注出——て雨ひきちく　春
あさ良の清きなおよ花もなし　丸
夜北ろみけ八月和る　亜
くれ乃秋美染吉のをうくふ　同
矣といへをうれ出てゆく　丸
丁百よい至二つらいする——　亜
るいところよ学乃　時　丸
追くなさく児さろいと　楫　同
玄乃霞ふ酒の材とく　亜

あちこちと折るうゆる亜栄氏　西亭

風のひるもうくひすの声　比良
雪とみのあてみ――て夜白川哉　仝

六花亭
一枝あり枝葉もなく
くの字形――て花ハ呉天の雪
小似もち

春天の西日まハゆ――梨の花　西亭
なこりの多き三カ月　泉　比良
伊勢もとハ鶉の啼もち　雪丸

俳諧夏之部

ひやつくや卯の花山の行ろ口　寄洞
五月ねこつ暖の　そら　能峰
郭公ゆく人をまねひまもなし　比良
水うなとはすまう匂桶　洞
旅すまハらも奇縁なる方夜　峰
か狩捨山――て秋の来ぬき　云
ういけ壺す赤敷頭のそろ坂　洞
小者をしんて又泪くむ　峰
女にもニつこころハなりもり　良
か哉の春栄のるくである　洞

朝ぬるそでの末よりうるちうち　峰良
をよおしひて吹うつる　花
二日とく萩の枯葉を刈て来て　涙
馬令落比可須和　る月　峰
かうしといますつてゆくてを傘う　涙
鉋つくひろ　紅みおるうくき　涙
焼おのてしくうふ猶の塙　峰
白雨のまるくうさうか池　良

ちよいんのとうかうしうき
あうう〜紅おをんせうてまる前時　赤徹
水鏡の巣まて朝のねいさす　奇涙

いくうう も 檜の角う 梗うみて　仝
ちぎってくまる昆布のそれ　徹
淀萩の号しの家の　月　仝
白いくとめの秋のうう史　涙
紀里しすおるじとかたの号を或　仝
成をおくみの山をねうひて　徹
半てるてうを那もさうの木　涙
とうといなる箸買ふやる　徹
心強のそ一おーとまもつり　涙
旅ふるうう為をとする、　徹
あうれくるやうな略略池のそい　仝
神年うをるえくれの　月　涙

へ——おて花よき歌をうへてやう　徹
笑のよえきらぬ哀ほうふく　宮
乱ぬてハ詮もきらひと笠みろう　徹
午のあくるくの海の中を　岡

萩と鶯舎合

まの水へおてそいるやうるるく　蓬宇
盥の水ふうゝす暗のま　喬岡
村乃ろるう通ふ船ふ——て　松山
追ふの杉の掃除仕ある　竹里
栗拾をよ年とるぐるくのれ　川
うるめをあぐるなゆのうみ　宇

ウ

十雨盤の粧ほてかくる池の土　里
かなへのてこぐのま速ま似る　山
きぬしのあやめの格み押上て　う
咯さへふく——なとくきす鳥　岡
あてうの傘——テハうへ里ナ里　山
撿校招く水のせんさく　里
寺なとる色の西のれくみ　宮
宇判ひろふ主明のろう　宇
務所さるの配当を配るあしを　里
黍の節——の一くらうなう——　山
こちくらうのいくらみ庭の花　宇
昔ふ引楽んて蜂のくるる　里

山うけの伏家しみめ――し琴て　立
雑具乃多き西の大名亭　立
がさしと笆の接む軒ちこ　立
新酒を春――ふかみなのてる　良

ふつきりと杉の花あり初日かげ　二泉
元朝をいえなとなれとおのひとる、臣春
えのんをえんえ狐、竹裏
えはやそらハきはみのまなつす、菱島
えはやうすみそふふの音　土橋　凡左丸
えはや程山よてくおのうけ　伊丹　熊峰
えはやをひるをれをれ、　今福　西鳥
遠望みこゆるやうな神の矛　大坂　鬼圭
うくひすのみちうしまうかさ行、二空
まつとつひとつなり鄙と談、竹林
初春を雀なくなる竹の宿、草意

孫子一て初うりそ乃春の若　春洲
杉みてく一まの末ぬ家もなし　比良
白雪のふり松とうも清き哉　大坂　樓竹
三ケ日も行く杉乃あるいかるとう　米雅

柱石舎初子日

丸いは松皆中一みうけて小松引　湖波
年賀うつのひとをまねきうつる　鼠探　白流
ゆくやよ女の酒乃をよの日哉、女　遊柳
松引て相島こて通りうり、二有
雪ありとなるまて松をひく日哉、一峰
新春乳人通くとも出人小松引、女　梅枝
象山よ舟かーむくるる日哉、　魚眼

人中よみてとなりみるまゆ哉、井眉
せうれて実をうりまゆくまゆ哉、女敎生
大坂
大根まで袋敎神るまのる哉　蜂な
ぶりみやまのみも汲み出る　春洲
まてうらのいくうもうるまゆ哉　升六
大坂
まゆのそるうともせぬまゆ哉　春我

何の木もまゆをうつてめてこれ　あさ
灯火をうえて出てうれつま　大坂　升堯
笑葉のなるねの四の眸うれうれ　二泉
仏の座きをいる神をうりうれ　竹裏
まゆやめてこうまうまゆ哉　味川一馬、

春詞のうつくしい袖あるなり　中央　呂耕
夜の鶯よりもどのあうり雨乃うり　大坂　文英
たゞもの烟の末やまるの雪、　石水
ふるまやふへんせう礼申す　神崎　白蒲
山元よりて西方乃色うる　大坂　紹旭
西なやまふくら雀が迫う来る　山中　凡坊

警

警うう傘作りよ小雨ある　淀　蓬室
警るの時てハのぞくいあり哉　芝村　半父
警や前うるうる夜の杉　京　春坡
警るの来る義おて朝来うる、　玉洋
警るやまふ松作しうさす雪の上、　古人　馬印

うくひす や 人 待 あ ら す 梅 の 木 も 雨江
梅 や 小 ち ら ら れ ゐ 朝 乃 月 そ み 霞瀬
梅 や そ の 収 ひ よ そ 朝 も 来 て 大坂 八十
うくひす や 松 の み 仙 や の 梅 ふ 家、 松 菊
梅 の う た ら み 暗 て な の い な、 空 阿
う く ひ す や 木 の 葉 の 音 乃 す る 赤 津 也 巳 洞
梅 る 花 さ く る も ら ら ら 春 外
梅 る 歯 寒 み ら れ て 砂 言 ふ 竹 裏
梅 の 木 乃 筵 の 梅 そ 仙 や ら ら 高田 紅 園
う ら ら と 初 う く ひ す な ら ふ 鬼 亜

梅 柳

汲 山 ふ 梅 ら ゆ る 春 ら ひ と つ 泉 梅井 吐 壬

卜 み を ま く 梅 盃 あ り う め の 花 五条 さ と 春
梅 の 月 ま ぬ よ こ そ 入 る 小 家 ら 尼崎 春 草
梅 の ち く 四 ら を 中 ら 一 起 外 場 白 就
田 を つ く る 人 も ゆ ら し き 世 梅 ふ ら 祇 橋
梅 ら ふ を 押 る て 出 る 木 向 ら 大坂 二 蝶
ま ん ら ら 咲 の て も ち 一 梅 の 花、 鶴 梓
傘 を 出 一 こ ま す こ う め 比 を、 地 座
初 ふ ら よ ら 玄 の つ 弥 し 妻 の 有、 錦 土
や せ 骨 ふ こ そ ゆ る 梅 の ら さ 外、 梅 後
貝 か 礼 ち ぬ 梅 ら 一 二 方 の ま る ら 外、 貨 石
花 よ 来 て 梅 う ち ら く も 食 ら 風、 蕉 里
梅 の 風 く 玄 な ん と 一 て 砕 す、 徐 来

梅咲て方は月乃ゆふへ哉　五寅
朝くらや石の光のうめの花　奇洲
うら窓も梅みる雪見哉　松菊
居ながらとらるや梅の花　露堤
梅の枝うつて鳴日乃る　出雲 祇孔
五梅や石影さく家の屋　綱 梅郊
梅柳一屋の庭とれるみち　羽川 蓬宇
梅柳うなおれがちう人のちう　大坂 斯萬
うら川や河原営梅柳、　魯隅
笠をとらハ取る梅柳の住居哉、夜来
みつれと旅人通るやちの哉、天馬
村中のちるよりみる柳哉　良

まち寒　五坂 乃ちるを　尼崎 春有
まち柳ハめてくまるそうめる、春煖
柳植て柱のひつこし出りうる　た舎
まちおするそうの砂を春りる場　含花
さ一柳春を五人ふてよるちう淀　支雪

餘寒

鳥追のつれまつ雪のよかんる哉　大坂 鶯笠
山里ハ絵のなくする雪て哉、祖竟
春さ一されと并つむ四のくる　唐崎 東岱

春雪

袖笠もそちらにをくう春の雪　大坂 梶窓
うす雪のとれてつもるそるの雪、時来

うすもやもうくしまへの梅　筍京
春夜
鈞漆舎五日會
春のあけ夜うち翌とおもふうち　春水
あるうちハちやうちやうる春の雪　一峰
杜一木そうねと春ハあけのこと　臭眼
えるのあの亭と鈴うり　桐の鮒　奇淵
まちおくふえるまゝかうるうり　井眉
山の府のまの秋うちふ鈴うり大坂　文鳥
るのまぬやうりてめてまの雪、　方水
まへのあの雪の外うう雪の　人、女　丑糸
えるのおや眼をあうする酒の息　越神　東平

まへのあのぐうするちり杜　扇　きく蛙
えるの夜をちうべてみせるそ夜外　露葉

春乃夜のまれふもかりぬふあ店　大坂　春恩
まちのあハうー容ふあけふう、　未炭

春月
をのうへまうちひろうりて　まへの月京　山の九
えるのおや戒ねうちてもえるの月、　美丸
まふうへ長深ちるつー　まれてる日下　氷水
柳ふもそいろうんー　えはの月　雨柳
まみうまうまうう一ろ兎庵　月　梅炉

春水

宇治川やそう流てもそるのゝ　宮島　梅今
玄のゝむらさきの花うつるまて　大坂　東隈
うきとつて掬ふえつはるれ水、氷ル
淵つゝの後ふ入や　玄乃ゝ、一炊
玄の月おてもうつ——て玄の氷、負居
水山のそよ〳〵しそるれそゝ、季吟
并も花ふ新も花や春れ水、方水

猫窓

門の田ふなゝうつれ玄ふこの玄　大坂　二中
春ハそれ、猫まて更ぬあ乃声、已就
ねこの玄我そゝけふなく柱そゝ　金花

二月

辛卯や二月の杉の雫する　二有
ゑ梅のゑ咲くす二月そゝ　天馬

霞

かすむ木を何そ咲やそ飛性ゑ　池田　遅実
を——〳〵そゝ山ハのこそす霞ゟ　雨江
杉の葉ふ玄の玄るそすそゝ　大坂　百之
まふ坂のあるそこそそ坂実ゟ　貨石

神祇

西月十六日西大寺の会式祈て

白林のよきなと句ふ玄ゟかる苦仏
写をつす暁ハやてし玄の袈　来雅
み年のあとそそゝし玄の山京　其成

虫

てふてふのくるくるとぶや蚯蚓のうち　霞棲
いろしのそらをかりくこてふかな　凡左丸
てふくやうつくしきそでこそ石　春坡
うめのちる歌や恠のなみだ　和桜井竹晴
なく蛙まの角田や似あひそう　尼崎春人
田一枚ちるうねてやなく　蛙大坂　水石

鳥

よたかをはるかにしそう事吐る、　鬼大
かくしてよをてそほゝみ玄のそら　尼崎春来
あたゝかれのそらもつふかすぬまのそら堺　曽笛
帝よぬぐはれ如法ぶいてう〳〵ると彦　なら　綾鷹

う礼しけふ時壱もありう〳〵るそ　左禽
彦明のまち一まよふみる岡の　草大坂二道
をち一そるの餘美なく一てこつ夜外　季次
ひろ家をとうとみる遠う郎ぬく弥馬
乙そ平煤よよこ礼一竹格子大坂百陸
いつのおも雨よちるしなく遠、　柿延
詞そ平一そ杉を己そてゆく植身花養
きしの声山の鳥撞うすえうう大坂主書
むうさきハそよもえて暁の経　方水
山言ち雑乃壱をそ春のそう　奇湖
みひえう一段あげて時みう　兎圭

下谷や　二ほなぐる雪解水　竹暁
冬ごもりむすめよろこび掘なる　儿桂
海棠の眼をさまさせて山茶外　大坂女　鶯外
うぐひすにつるんでゐる鳥うれし　枕堂
小川を餘さずうつる根芹外　金花
をつゝるの記をかゝる田芹哉　二窓
柳うつ流る水ぬる根芹かな　二園
菅笠の往すてくみすうれ外　貨石
すうれそなゝもひの外よ根のふうし　二泉
人くも杖うつくれてうす童　奇洲

未

降雨の中よ着るよ机の菊　地揚　大拙

未だ芽ぇて相のあつの乾き哉　白泥
大冬を宝ともちりて椿哉　儿桂
ちとのるの寒さを花おさく梗　大坂　吾雀
朝はるやいつもの木を花つゝ　奇洲
花桃のきうれひをさる一木外　大坂　素覚
咲こゑすうの日の岡や赤つゝ　比良
花をのこりけるおとさすはし外なら　戸叡
海棠をおこつゐるよ村　雀　大坂　二松
とそうれや人をあやなす餐の花、　如陸
山里や餐ふおくるゝ　鵜　仙路
みちの餐ふうとまてハうううう　石水
三ほ木や一陪下るみちの花　蓬宇

初さくら雨ふりそふる夜を咲ふり　豊浦　其柳
雨となりて一ましへハ初ざくら、女性と
二夜の一ときつるやさくら　加州　牧山
山本や花よりそふるの神　探　蓬宇
朝風のおいてしまへハ初さくら　ぬる花松
山るは花つまくやいと　探　とく可肖
まて風よくふしてきりく　探　岸さく　三秀
吹ちりてきえうせ山さくら　大坂　雨葉
おそよ門おそハぬ内もさくら哉、　為居
鴉さげて出る汐までちるさくら、澄来
ちるとへなも傾くさくらかな　士峰　采訳

山里ハ半つ風く本もさくら哉　二柱
行春ハ方ふさがりて探　一貫石
雀より先ふさてみるさくら哉　池田　李香
毎日のねくれの末るもさくら哉　猿蓑
あら雪の松山こえて探　さくら　比良
嵐降の寒きそ一ときり探さく堺　士芳
散みて一山のこすさくら哉　唐崎　花之
一谷市風を通さぬ夕さくら　京　李諒
一日乃人あるを待ちる　探　神崎　仙李
さくらさく朝くら花のちりおそ
山おや水とそなれてお花　万水
我ふ似と蝶るもの夜乃そな　大坂　美雄

花ふてる歌おもおもろ〳〵　多の山、花陽

嵐水嵐山都　白雲

又ほくろれを風もあるろふ花うねと　大坂　瑞馬

花のを谷ふこちなまうろみ水、加道

花のうみよく〳〵とあのふ人ハなし　鷺土川

何をまて心結搦みちりぬ花ふる　白泥

初風の末ハ吹ゐて花て〳〵　多　春葛

三月

三月の深山よとくは和ろ　祖亮

牡丹まて咲三月を楽よろ里　大坂　左逸

釜生の宿をろれろうやま山　住柳

くさ〳〵

爽の山ちひちき家のふえみろり　爽亭

き物ふちろの住ろろ多の風三ヶ　逸民

〳〵おふも降てろへ〳〵えるの雨　掬句

草の家も爽ふへぐて八歌ろろ　伊丹　駒房

夕暮をさひ〳〵れとも爽北星　から　杜口

冷とけやくえて〳〵き引板の音　猫井　里川

義山乃爽よおくれてこすれ家　大坂　半雅

楢乃木ふ今〳〵〳〵ちりて家　味川　其梁

炉ふさいてこのをろるろひろ風　五条　竜遊

長ろをの報よ入ろ干ろぶろ　山女　未徹

まくのるやいをの浦風二文ろ松る　大坂　圭章

辛崎の松をえろ出す　釈ろ風なし　其村

きさきの　萬乃宿ふも蝋　汁　吾崔
行春
ゆく夏や投著あらる崔のみ　京　瓦全
行春をおくらぬ衣や多る屋　所　梢炉

羈旅
山ぬみや近江へ出るハさらら降　大坂　三津人
あさるしう霖侵とられて朝掬　鵜城
春の旅一里おくをてくちふ危　梢炉
鳴戸夜泊
海ふ底て娃きく衣と歌ふり　梢兮

發句之部
首夏
君ぐらし衣ぐらもの上歌ふり　二有
家ちゝみ夜のうろえや青すゝれ　草伝
ゆく人ふ風のこえうり衣うへ　比良
あらしいに有の実とやうふ危　大坂　集湖
牡丹
一ごゑのゝ〜めを旬ふ牡丹ふ　尾崎　春皐
ちらりふ傾きうゆるなう糸　花う
遠ま花
午時まてを朝乃うちうり杜鵑　夜来
大義乃ぐらうけ抱てうきけぐく　綾媚

あくる朝あうたれを杜鵑　方水
思ふまゝ　てな杜鵑きりふくり　蓬雪

卯花

うの花や日くらくあれる夜の雨　逸民
卯の花ふ卯の耐雨のくらさ哉　麥穂
うの花の中一出ふ不たる蚊の外　素人
卯花や星とふりふの面　如陸
卯花やふくるしふ竹の宿　大坂　采女

郭公

為ふて鳥ふきす通ふり　兵庫　一算
山里ふすゝみふしふやきす　訥夫
ふゝ私もふゝふ中一声　係ふなす
春城

無筆ふ調の句ふ笑す

附ふ血ふなく覚我の哭ふ　土川
郭ふ月のふゝふをふみふり　戸素
ゆくへのちひさくたふて杜宇　可省
ふくふきすゝもの中ふうけ通る　斉物
ふ泉なくとふふおもふふり　来邦

布袋

おゝ哭ふ山もくづれんふこふ　大坂　字舟
名もふふぬ木たりそふし布袋　隆麥
市一おそく木のふさへふ一ふんこふ　吾雅
おく山や雨ふりこんて宗匠ふり　九狸
朝哭ふおゝふ壱てかんこふ　蓬宇

若葉

白樓乃方右の〳〵——きゝ初雪弁 大坂 百堂
皆うけし駅社松もとゝ松ふる、風の
雪ゆきを二度出てうぐひす禁弁 京 梅價
白々の中ふわ〳〵ふやうつゝし 二蝶

草木

なんなおの経いとてもゝ〳〵二輪 季諒
あるつゆ叶花とあるやゆりの花 可慶
ゝ月ふみゝゝ笠のまた九 来賀
凡の芭ゝとつたゝりハ面白〳〵 蓬夷
花とゝん——きゝみもゝを初旅る 竜遊
芭蕉の花〳〵ゝゝゆる六月ゝゝ 大坂 蓼二

夜菊のさゝゝと咲て秋ゆく 瑞馬
蕎の花もゝゐる蛙ゝ 駒
ゆるゝとハゝゐゐゐの杜弁 栄美
竹のまやつゝゝしとあきま 外海
牛柱て老学ふ宿ゝさん 芦遊
まゆゝ雨のやおく源山弁 仙李
稲株を鳴ゝゝする蛙ゐ 大坂 松栗

冤答を俺みて

まゝゝのせなふゝるや東山 天馬
杉風のあゝりをちるや柿の色 二道

端午

みしゝくていきせさゝまあやめ弁 字舟

う礼しさハまふもあるりて昌浦大刀 大坂 宇柳

五月雨

鷺たりうえんてるお田の五月雨　拍後
五月雨の下よりうりうりながれ　鳥居
ちけあるーあやめ売りさつきる　其角
店なかつて五月雨へとつ捜くれ　露沾
そのくらやはもあるーの五月雨　石水
つゆのそら松なつえてられてゆく　松菊
おもしろやさつきるてのつの雨　京　素覧

虫

前代のあのあるりをとぶ蛍　梅翁
牧のてきや道のあもちるあーと 大坂 出真

そのそて蓑をとすみりう蚊　二柳
あつのある学ふもまして史うも　赤徹
相島やちまりふのうつ蝉の声　雪春

鳥

ふりけを投よ多も粉ふ卵　半父
稜ひとつ粉なこえまて接ふうう　秉彪
山うみや道の中よなく水鶏　其柳
ふ鶏きく年脚もみや麻のそ 此頃 車端

夏月

湖乃我をふまーてる乃月　李春
夏川よあるる秋ちう三なの月　秉彪

涼

鶏乃初なすすしや麻の中　京　蕉風
捨なふすゝしや麻のそよ〳〵し　蓬宇
元の川ふつみて亜てさゝえ外　二甫
ひるまての涼しさをかく杉葉外　夜来
未るゝ〳〵大川ゝえて飛ゝをる　比良

暑

かさなつて松の緑ゝるあつさ外　竹晴
あけきなや一ゝ乃居ゝる門の口　杜口
涼風もまゝ花前のあつさ外　麦生

白雨

ゆふ〳〵やいつ礼の降雨の放ち　雨葉
白雨の大和通るよ〳〵のよ雲　素皐

川狩やゆつくりもりのくるゝて　一馬

清水

あら〳〵しと雨のうちこむ清水外　奇淵
旅人の見出すほそ〳〵の蕭散　白跣
山姫みよる乃こゝろる志こつ外　季武

くもり

みしらぬや月ありなから朝の程　左舎
おもてもつゝまり鳥帽子もなりかね　其梢
坂本をくるゝ去かたのまゝ嵐　花陽
まゝ赤風のはてぬよ入口こ外　遅柳
庵の夜をねみりつゝぬ照射外　花之
抱笠ふ我をゝゝて森入ゝり　左逸

むしろ干や松ハ肥くる門のに　可省
河久や胡風の笠ゝより秋をし　呂耕
飯くひし人もいる越のそらひばり　集湖
汚桜ーてたやこぬをし紅お山茶　春秋

羈旅

初鹿にて

白雲越押上てみる笠の外　縁鷹

素性法印の塚よまうで

左伽のおくこゝむくげ哉苔の花　仝
山越もそーろなりぬ帝懐　仝
峯の寒よりし時

雪乃声も老そう鳳来寺も　杜に

石山もまて

おくしとゝろみしむくるのる　仝

志賀の山越ーて

何もなし昔ゝゆるうんこる　岌

笑巌山おて

おつくさハ伊のあもたーこる木立　仝

まひこの浜まて

松なお海へ笈葉乃茶なうる　風気

さゝーさや雪ゝまの朝の雨　京玉屑

鞍馬まううて

竹伐やうる杜乃むら雀　雨江

甲子紀行　　比良

月日も百代乃過客にしてゆきゝもまた旅人なりと
とゝ乃翁もいさゝひろう乃人とたゝりて廿有一年の旅路乃東武よりまかりて三とせ乃夏乃初つかたうきしつもの
くみたちつゝしく在外とふをのこをみちしるへとして文化祝乃とし卯月廿日乃
いつか松生よりあらぬ黄吐小笠うちうみりて笠つらなくいでゝつゝ

名ところ〳〵花のあるりの旅路哉

行徒乃宿をとゝもてとりとゝもふ迷

声とゝゝゝゝ礼をあゝゝるも加人ゝる

八日　揖取浦ふ船はく出海乃奥ふ猫のくちとふ
　　猶仁乃日ふうゝゝん和尚奥
香取社ふ納

ふゝゝ帆ふもふてみてとゝゝ柿の雨

鉄ふ浦ハ漁人軒をならべゝゝ牡丹ふ酒くみすゝめもゝえゝゝてゝゝれの花ふいふへゝもあゝす

五月雨のゝゝゝりみゝゝ海乃上

あゝゝ海やハ五すゝへのふの月

九日　麻島明神ふ詣す　當社ふ神代ゝり不変乃地
みて古松老杉鬱然ゝ脚　弱松様ふ変工接葉
ふ指すゝゝきの高社ふ要石のあゝゝゝなて

第代やうとゝゝゝ石の苔の花

庄内うひなみうまごころもおもてさす
湖水若松う梅子 ひろいて
三首乃内も鳴そ行くる
竹藪よてさるとりをスてこらよ
すまよし出る の雪ふを集す
こそろ〳〵こきろ〳〵ふろ〳〵きく〳〵
十日土浦安る大杉の神 ふ詣す
十一日筑波山ふ於拍掌拝つ称ふ宮拝とりて
行路を却て山頭越〳〵て雲泉混ふむを
〳〵〳〵〳〵
出石ふ宮 ふ根よつ〳〵雨のや
〳〵いつ〳〵のつ〳〵ふやふる

十二日下田ゟ 長田村へゆくみちよてろす比月先
詠ふ往来ふ〳〵ふれハ〳〵ふる治ま〳〵 ふの字五
つふれるゆふよす ふまるやふろいふ〳〵て一夜をあ
ろす

部々我を治るみ月お
ま〳〵ろすさひてすま〳〵眠まろ〳〵ふふのおのえ
〳〵ふくもゐふ〳〵れハ朝の〳〵ふあす 再ふ宿
儀をろつふろるやふろよハ似もつふいふふふふし
乞ふろふす
十三日 字 称 ふ出る景ふろ白光山のおふふちろ
ろのち西ふき校の木ふ〳〵

乞食八ま〳〵称てみるや木下闇

十四日光山ふ詣すてふそうりてるうさす他のふ
よう貢寄ふを終えて
唐めた——そのゝゆう——紀牡丹
十五日中禅寺ふ参詣して黒髪山うう景良うむうし
を思ふ
行ふいて衣うへさる山ぢうん
湖水
鳴の巣やところ〳〵しの朝日うみ
麻のそのふと咲てみる色の月
霧激うう日んの乳泉のおくうふて
はうしと冲ハ風あるまうふ
十七日帰ふ礼　神廣三社　鎗三百節　御ちカ

弓鐵炮そうそふいうかもあります　大神　三社
大せいうからて行んのそのふ柳葉一枝ていうう
さうう

花柳——あやめのちカやけの光

社行八四ちうへうる古こ公花亭の橋ようう——て
帝奥の桜ふうさんようて花ろうとふおうう
てそうら本の私をそふいとをこちうと我もおりふ
文仁政元初秋

月　　岩倉集のおもかげにて時候の序をそへ八す

秋なもそつて暮くる柞川　　京　春葛
住ふひやてそ兄宝る松乃ろけ　　春皐
名月や長柄の渡よなく　　鳥　魯隠
名月の末おさひ——宵の山　　京　定雅
名ろふまろ——て雨——一夜　　来雅
名月やんのうへうを礼くろ　　大坂　宅来
ある秋て花八ろれすろの月　　翔蘭
さろら木八そそ〳〵ぬつもりもけふのそ　　蓬宝
ををまそ〳〵ぬく里も月ろろ　　拙堂
——ろ〳〵八居てもみそ宝　　氷几

名宵ろろんはなをそろすろ　　京　尾蕉
淀をもそ〳〵ひそる秋のろみ　　大坂女　て居
いそ〳〵ひ平秋を等知のまろし　　二有
いそ〳〵ひの挨拶つくる按ろん　　夜来
これをなきなろう老徒を
たの——む
胡子する処孫もあり月のみ祢　　土川
松ろ衆を正なろ——や峰の月　　淀駕
北ねをき月のあくまてすそあろう　　大坂　蕪和
牛宝れそそそのそあるなあろ　　蓬宇
すつろ〳〵秋ろ朱ろり市のそ　　松菊
ひやし〳〵ろ——そるよ松北宿　　二松

なりぬ　手叩きてゐる朝の月　夜来
庵秦の雪――あふ庵のうら秋ふかし　京　蕉良
雨の月松をこころのまよひかな　士卯
雨乃月あ――とのそらうなるのみ　方水
象まなとそよらぬ萩やのちの月　龜遊
暗の声う――ろふさぬけそうせ月　大坂　屋烏
ちらちらと小暁をゆつるや后のうら、雪人
後の月お菓のうへをもるゆふべ　其村
后ぜと萩のうへすうと礼ふり　石水

初秋

村雨のついてうち――やをさる秋　蓬宇
旅よまる松ハ――うすうるの秋　春思

聖をくる庵礼ハいをうみをの秋　魚眠
相の木の島をおてて朝乃秋　半雅
でつとする白雨ふ秋の来る秋ぶ　集湖
又ふや秋てとしの空のいろ　未徹
作山な音ちう相の秋のハ　注耕

七夕

笹代を椿のうえ――二ツ星　大坂　吉圃
遠山へ面うねうねうあふの川　蓬春
山里や板のうへのしの河　比良
みうたの入――あとなうしの川　戸散
逢坂のうら上よりぬあまの川　李春

千句留畢

左ゆや鳥のこちー言 灯筑 可省
うれもの声もてひろう 墓条 高安 其箱
掬みれ宮さへこ係れてうみふ 主旋
鵜つういあるるー その秋をの月 仝

露

浜そや西ねさすまてりれ、春 春亭
朝つゆや雀の巣をを掃よせる 蓬宇
雪の夜をもいくつ歌ー 松久 采亮
白つゆのやーなまそのうまを 孤 其利

鶏かうやうひのてまうへうしか

秋ーーて 校
秋そのうへうれーたおつゆれ 大坂 潮卜

雪のしもまを、松とつくる雀うた、鬼外

稲妻

いなつるみ稲妻あうるくらさうた、 長江
稲つるや、そうううーー くる山の家 白就
ななつまの宮つきふくー 西の京 八尾 語お
稲妻や 浪うちあげる島みち 李春

蓑一

あさうみの凋みおくもも衣なり 半文
あらうみ社鼓鳥をうきみくうり 弱有
蓑一みせうの方の秋ーをうま 梅我

雪

故さくハそも犯そうむーの声 比良

受けくぐ髪よられるいとぐ外　雨笨
蛙蜘ま夜をとられる垣根外　奥眼
森てうち八人ぢりさり——きりす　素頑
月の夜みられもやらてねられ　井眉
笆ぜ笨八夫よもとられす蟋蟀　支雲
何よそって秋をみりゆくふも　其村
去らこのよみを重うて秋のふ　大淑女　きく
とうもも々——ねみあらす秋のふ　池円　故友
雁瓜なる靴のうときや秋の蛇　雨柳

鳥

鶏ねく人のう——ろハな扨みて　季瀟
うづら時分もすてぬ笨山外　半雅

おそ——ろき祖翁のくうこうる　春亭
里ちれ——まもみちちうこうる　戸散
弱る時や杖の指すねの砂里　拍筏
みえぬまてんをへうたちる　楠分

鳥

砂原や落はうこくを扨よる里　祖竟
雁ら祢ら来礼を近江の月夜外　宋也
ふの原笆あうみえる夜ふ　半雅
をもちうこの月の来ちりてのふ　二蝶

略

烟そ八暗もうつなり指小舟ち　魚山
略そてふ八朝まて月夜外　蓬宇

雨の晴さひ——ぬすゝ暮の霞潮
さひ——さも花よ笑つや晴の声 大坂 銀友
晴くつやまつさくらちる菊の上 春湖

秋風

古めかし——宇治の泉遊や秋の風 可俊
秋風やひとうすまのそゝけ髪 春坡
おとろ——と浪もよすれ秋の風 春来
秋風の吹こるもみぢ模の雲 七湖
秋風や雪の居ぬのうら〳〵 大坂 鹿柵
夕烏角を秋風あつまれり 七湖
あき風の日南へ交里よみくだる 拙堂
よき花よ朝のもとう朝あ—— 祖義

あとうかのつるのある里も秋ふかき 村栖

鹿

七月の秋も宮うてもろうの下 夫書
さひ——さの中のそうや麻社角 大坂 千辰
晴麻のなよ良なへもとう朝の山、空間
麻なくや宮うかする 洒四 加道

芒

おなよゆり動り——すゝきうれ 梅就
くれやすゝきその八水くむ芒 仙李
那うの落うれて気ぞ——みつれる 洒四 五陽
夕日すり雪くなつゝ芒うれ 大坂 一鶴
秋風よさをれぬ萩のそうろ、 西森

旅人乃ゑ仍こゑをて花すゝき、長舟
花すゝきうこみてつくや朝の後　鳥山
うるて落ハ花みつみれうり　春人
あつき日なあまこゑ〳〵て花落　李杏
古家のとみさる礼てなすすき　集湖
旅人のるまふあの尾花哉　春水

萩

白雲や鏡の旅出す萩の中　蓬宇
おく山やみちさへなくて萩のも　可慶
朝つゆといとつよちるや萩のも　可慶
白雲のも花のいろちる小萩哉　左圃
白萩うところをめぬなあるる　石水

白萩ふきけのこゑゆる垣根哉　金花

女郎花

七夕の秋ゑ吹おてをゑへ　集湖
おれハそうのこゑちり女良花　吾雅
なゑゑへ〳〵ゑをゑ不破の関守　大坂半輪

菊

雪のひ乃菊もくちりふ生〳〵り、　國瑞
白菊をくれて淡辺のあらし哉　已吸
きくのふや世ふ垣根をぬ人の永　李杏
白菊うひやしとゆのくれ哉る　李夜
ちうゑて菊ふ生ゑ〳〵秋の山　外海
いろ〳〵の秋ハあれともおくの色　李英

きく咲て霜ふりそめしハみ月　貞石
村中の半ハ出て仕てたくの花　春海
草下ふさ〳〵出ぬ菊のすくなき外　加道

やまいもとゝみえまして

てへ竹みすのうちて菊の紅を見
朝まだきの庭を合点なりけり菊の　桃裏
たくの葉をてらすゆふ日かな　柏後

萩

大ぬのゝつゆをうけたる萩のえだ　大坂　素石
よきみとの声なきうら雨の萩　有居
むら〳〵と紅ふ二人や萩の中　猴好

草花

よねそのハ朝のこゝろて蘭のかな　臣嘉
その花弁のまうく歩みより　左衛
ゑの陰ふもの為て秋海棠　白洲

稲

ゆく人もとゞまり見ゆる稲の花　其梦
杜風ハ海へふくりいね乃花　杜口
まそ〳〵と情をつて咲稲性　李春

蕎麦

蕎麦のまの玉のゝ〳〵ふる雨の
なるんてくよ〳〵伏のゝ庵さし　百里
蕎麦うちの音ゑの秋のいろ　如陸
秋々　島山

旅人
比良
宇治山
秋乃月
秋の夜
秋の川
秋の海

旅人
比良
宇治山
秋乃月
秋の夜
秋の川
秋の海

會者定離

あさぢ生乃むすほれてけの植　方水
はゞ月のいろうつもこむ花ゝな　花陽
うもちつむ禮う雨のそゝ秋ぐれ　春坡
ゑつゐる時をゆふへの法みかな　左舜
末枯を駈よ出さゝうゝ乃ゝ雉　百島
陰雨柿やおもひうみるね一つ　大坂
七月も末のはつやよみいそし、　名何
甘干

お葉

山ぐみのお葉ハ赤のみ一記氣　芳趣
をもちるやおくのお葉も二三日　一鶴
宿らさぬ里ゝもちくすゝみもち　祖竟

長月も末一段や山をみち　蓬宇
村雨のあとやさきなり山お葉　四條
お葉をぬ木ハなりくる里　大坂
乾付ハ昨非
をみち一て見るふくる淺山、　柚土

暮秋

ぢゝう咲稍の秋と歩みくり　方水
那羅乃坂みくり一て秋ふくし　瑞馬
秋ふくしなふうきくつ杉のあ　逸民
くれ行やひくゝハ秋のうけそう　柿炉
さゝうしう秋もいぬめり萩の宿　蜂夫
ゆく秋ハ竹をうへのまみ氣　苦仏
小山のをみくるくれなゐ氣　季吟

羈旅

旅の日のそらしみなつてお時雨　拙堂

東武より

秋乃日のたつことてる弥水戸通　李春

とくをやとみて

名をみちまくしくれすたく児　蘆里

附ねするもよおかれて爰そこもと
ときく木の枯葉もつきすむ村しぐれ　竹晴
大菊の菓子は雨て居ぬうち　天馬
二日ふもたゝるめうりの附る頃　已就
　　梅後
　　後花
ふく花あらうさくらなき吹ふる　奇淵
破て見るくそなられふく花　若翅
かへり水みうつれる木の中な　春坡
ゆきられ一宿ともなうす陰　豹馬
松山ハさくらの花ちりうつり花　狐狢
　　落葉
帝陳のかくのうぐるて爰芽ふ　天艾

在そいて在なうれ松ハ爰芽ふ　雨江
十つもとハ鶯ふきうる爰芽ふ　文鳥
　　枯野
傘一の乗りきりふ枯野と
るのするこさ松みて行枯野ふ　蓬宇
えとうく書一おまふられの原　魯僊
　　枯草　梅炉
鶯のふ房うく枯る尾ふり舟　仙李
うれてさへ風のすうふ尾ふ　外海
さ一むふねもー一つ枯尾花　蕪堂
着枯てふる川のうすみふり　時翁
冬木立

あれ松とふさこくをつくる木を　左膏
みるの次手つくるやみ中木を　秩山
左に中干菜つくられてをるもち　宇柳
猿時て木立ちくらし　をの山　仝
なるての芳なをつて居るを来　方水

草木

をも牡丹小ぶりなれどもゆたかさ　駒角
さを菊の根をのべをふつみくらし　紫女
る仙の土用ふくるほうかな　臣来
水仙のきらくしくして咲みち　白乱
とくみ一みをおうみくうつハの名　如陸
ちくん花よ雨うかるとなく雀　竹雨

風

くらたつくおちくー雪も雪の月　字舟
竹舟う芦隠舎あて
木枯や一古き芦史をかくる宿　丁江
夫かくーの袖とかすぬ境の色　春人
氷鳥
いこうやちくうみ中の流ち魚　春思
乱ふる中舟のあちらの女　露蝶
何ゆるふひとつをちれて朝鴉　蓬宝
をーるのさちゆく方や乞の川　二松
うすくるくるくハをくー鴨の声　李謙
田れ鴨やーあるけハうこく山のふもと　時習

雪

ゆきや大きもみする行の門　立芳　梅居
神垣をよこぎらえる帝獨歩　春秋
神垣やものうれしくも松の雪　取國　和山
松の雪鳥なくかとつりそう　花枝　春
花枝小釈迦鳥やあさの雪　呂耕
閨の松の雪をふるとみて厦の声　士川
雪ん礼て夜のあらしや白き雪　二蝶
雪そうな伽雪へとまるてんの色　二道
松をこめて葱のあるし里の雪　米寿
小松井や鶴のこてる松雪の陣　三津人
伽雪うもうき世へつくてをのれ

夜北雪門くかるく笑あて　雪茅
最原やあらしなるうの雪の庄　桐柵
大雪のやうそしてる雪の宿　時来
なるふ原やきけふの雪け上　支雪

霜

なでしこやかよな花の霜みて　李春
追くふ赤出すまの小家赤　朱文
なるもらいさくなりぬ霜の色　比良

神祇

灯火のうしろうさよ神のうす　枫橋

竹瓦橋ふて

達ン忌をさられと竹の自立赤　大坂　馬肝

更ら八筈の月松や我ゝ　一馬
森る——てくる高すゝ我が　梢炉
たちゝゝな汝那めうんこ名　大坂二称
我が月我八おのゝまのなゝす　八珪
くさゝ

名のなとなまハくすむ庵ゝ　和山
名ま月をおハへまくるや　机
相のまよてむくてこゆれ名の月　机東
名の方我と鳥う森ところそ　京芳洲
山知ふ居茅ふ名の豹ゝ風　臣秀
京中ゝ聖名えてふさそゝる　天坂文頂
撫ふハ枯てき猪の淡るかな　庄桥

ゝゝしなゐ切のる暗みゝゝり　二有
炉定の表そなる座の古ひ我　杜口
枯芒小野とハいた——岸俵俵　計石
ゟ——おー——のゑも皆そ岸俵　加乃
名ここりめてそよ人の救ふいる　芙書
愈　瑞馬

未ぬふふ杉尾さそくみすゝ乃外　来紀
清名の粉ふみゝ礼ゝり命衾　斎閑
我ふ似てんそゝ——ゝ——ゝ　方逸
能ゝくゝるゝ——ゝとゝ我中外　徐来
ゝ治ふふう——ゝ向ゲるゝ我中外　鳥山

去夕の後鳴より氷るひぐき升　宇柳
山里の笑日ふとうーき禹々　夫書
やらきハ氷るふ迄寒水等々凪　行裏
山畑の凸凹さへ〳〵大根曳　全
大根引筈の松風等ふそう　二加
〳〵や松前拙てくすり湊　比良
翁ま坐右の話あり
にあけハをらうさくさゆる舳艫凪　其梅
頃くるをもて放ぬるてみをさへ　花陽
作ん花のちれハ日乃入みそふ升　来旅
みそふ梅ひさしくするくる旬うれ　か道
ま梅や一ふをむさかるハま文のす　月居

舩々常あそこ多文を後月　蓬公
ふくけやこそふ芭を枯そてる　仙路
茅等
柳のこゆるくとてねさ凪　氷几
梅ま日るすはくくは走かな　学舟
山ちや杉も枝もし分その　二加
大ろくく声扶ら常屋くら　学依
柳ま文ま〳〵のそのよハしつらし　尾鳥
松ま文ま松一乃の文ろくらく袁　角江
年のうちま文ろつこの日
松ろり句せろりゆく日の文の声、女
煤を打一ま歩ハ客もみさろ句、　柳化

笑ひや煙えだ一枚の雲や灯花 山田惜鳳
すてきや宿ゞへうるくきりとす 子柳
そち揺中つゝり床なくもる良の町 春皐
めちつゐて花のもとゝ朱みそう 豫考
営る乃支えをいそくすゝめ 朴一
ゝの暮山ハきのふの気なるう 未徹
山里のゆうぢう売ゝのくれ 比良
まるみてゝもとゝハ営るみそう 来紀
ちそうるやどこて年しる小田の鶏 養軌
ゝのくれ小娘ハそゝみつゝひよ記 蜂友
ほくそ根もきゝるをのくひとつ弥大坂猫行
ゆくゝ故うくてもそう杉柳 鬼圭

落あらき梢ふ眼のゆく岡久弥 春覚
大ゝ一やうゝうきゝ秋の又 比良

羈旅

名乃みて
格ちるよ笑の花ハいつさうなる 和園
船中
あハ出左ゝ波ハ生活嵐の空友秋 奇関

春来

獨吟

さやふけ秋ハみえそふ砧月夜
水ふひやゝし柳ちる音
きひ一さの淀る小舟ふさなれ
山のきハふらはくく　白砂
長ふきよ杖を投こむ舟の中
酒ふさふふの妻を酌ハや
うめふ浪の松ふ　指ふうちふふ
初の舟店のこもの一つふなる
幸ふふ集ハふすす板ふ入て

久のつゝひハおゝく礼もせす
うゝふてた玄の陰ふをひきそつ一
月中言やまゝつゝきの山
あちこちふ接出す境のさえゝふ
煤乃古なゝく風のをふし
已ひ一さをくふえを一と頃ゆて
声をゝふきふまむくの粥
あゝてゆくえもさゝめぬ花昌を
札のうへふを一む三月

さゝひふ
あけゆく秋氽鴨ハをゝすす指の月　箭箔

あふ一の志めるの雪原のみち　淡路
大嶺の峯さえうう月夜哉　雅
ふゆのくめのぬさをみうを　河
今ふゆるきのふ秋の内綿　陽
社杵のおりをころかてる　社
川すちみ嶺にまき庁さえう　就
きう出るうて俗の暮時　筒
花まこ八男やまうふみを居て
先つ着くる國方の伏　河
山辺の花ふうふ一うみ　就
前代つくる水の堅接　社

前前　斎河　白就　未就

郭連社無行

屋のさをきの角ふうう今里　氷ル
川田はくし社るしみゆ　春立
稼乃就ふすさいかうう嶺て　白谷
きくちれぬくくふきをくさ　玉溪
ふみそやまうふるーくう市町ふ　如陸
もう振るぐくまい川の瀬　魚変
海やのあをくてあれ海辻ふれ　魚喜
衣ふーこをのーーやとてふ　ル
何へるまてのふ猫ふさこうく　ユ

と羽吹きて籠の鳥舞
こゑやせよふしぐ姿のおしこと 陸
通照きぐぬ 奈もするん 答 濤
とんみるとき月のきよ中きぐに 交
地の音さへも 秋ハくれゆく 李
神送酒ちとるー 来るこ 九
生村をくれめめくつ 家造 ユ
おすぐくせいする花を 荒て 答
一首くむるよ 詠生はする 濤
二うつしすきハ巣よなく 杜う 陸
箸めよせきま ぬ手く 交
手ぞのいくくうくるくおりしおー 李

三十二

降ふくれハきもくんきう 九
うつろ舟つなぎーやしのきのき ユ
何を祢とみてるのお 飯 答
周果陸りのやうくふとれぬる 濤
洛居ようくふわろ小ちうと 陸
名兵も蚊のす祢そうおてへ 交
それするル虎のすーあくふ 李
三十日ま一角なぶらきう踊るへ家 九
植おくれなよ 祢の鬼灯 ユ
三消炭もよう干あるこ灰もり 答
今ハ幕一みちうーみ吉筆 濤
押ちくへちえの話るを雅くう 陸

ゑうしいろ〳〵移のまろこし　文
晴の花や庵もなまよはうそし　真
淡菜まつむるもろみなる比　執筆
　　永九五句　春二五、自答五、
　　玄清五、　如陸五、　奥文五、
　　奥真五、　執筆一、

却まよはきく人そそうて花ろ風　鬼哉
九日の朝もろすゝき行　猶行
屋とものをみて寒る嵐也　日
土の一ごとのうゝつきもせす　哉
十なゝ九れと拍板八ゑのりく　日

宗依を待てこやりくる　雨竹
う世の中をおー〳〵そく猿ろ時　永
海苔うちろうハ亀の名取　日
吸ろ口霞をつろる情みす　竹
柳のもー〳〵みえをとろえる　日
ろつきの蒲団とり出す夜の月　永
経よみよゆく風の声中　竹
四一おろー〳〵八棚みられるし　日
水鏡ろ来れを餅ろきやむ　永
めつきりと病ハぬろる山の水　竹
刀のろみりさいろる俺　日
み花みそやつろハろ二日三日　永

てふのきくんて文をしてて

鶉乃沽水ゐてきぐむそ冬舟
時雨の秋とるるうへ山里　石水
きぐうへの音まれすくん待ち　加道
伊豫竹の篇ハいつもめてこそ　来渓
風きくぬそ木乃松もめてうへく　美書
名もちよき島み朝　畑とつ　竹裏
う百聲のこちち乃蜘ゐ紙まきて　貨石
夢乃末居そる六月乃　照　宇柳
夏そくゐ水見ちくぬそも咲安そ　半雅

用ふおろうへ船のるす番　祖務
風呂市ゐ論ゐのひろう遠そう　集湖
朝乃そ乃　相ふる　前　屋蒋
山路のぬそうちなそんて秋ふ入　水
冬紅そ末　末狭のいろ　舟
ゐ月のうけふつそる小のれ　賀
まそゐめハみそうつきくのやむ　道
杉板ふ孫をゆちなくる神の景　裏
地つまひぐきて四ふ一連そう　当

一なもかくさずきゝ暮はる升ん
伽がなくてもおる炙ハくやさぬ　春が
白妙の雪うら梅乃ゐもて　遅桜
庇殺秋めを八男なさなる　三有
すつくゝと旅の捨こる左ゆふ　か
汉山みゆる八なの水　ん
う鄙秋下落をくれくる丁の声　臭眼
水戸の和仁元をらす行燈　柳
焼をゝやして居れかてもな　有
意をゝえる夜こうよおる　白流

ゝこの夕暮のやうなるおときす　膝来
附なのうりのどこまでゆく　ル
いの戸よ涼掬ひ雪のうく　ん
含おずいきをゝる捨ふやる　眼
関就る大津ふくろも秋の風　ル
ふゝきものハも食なるへし　有
花ひてあるう雲なきうだ掬　流
ゝも長ふよ踏つみてゝる　柳
二落うゝみ猫も恋よハくゞれし　夜来
扱乃附斗てめゝを仕ゝみる　二江
今昆社の吉労もうけす濡就て　仙路
ゝうゝなつけゝ風うなつく　ん

お汲の下寧をる翁 屁さ 松
ゑの棟の一ト間つゝてさく 路
うなも除のひとりふるへまも 六
待夜乃箔を息もせでうつ 夜
を拳うち病とおもし眠をやさて 独坐
西風をうち秋よなうる 松
まらとの柚ウハ祓らす笑也し 秋
山たてのバすゝ朝をの冬 六
うたのよの梟やく眺治うたし星冬 路
大勢よつて壺を引する 坐
顕ふ関の末入るとゝをいい 松
家の用意の十の座庵壺 表

面白やたんてもまきてくし外 公
丑のはてとようらくふる 路
外公七句 春外巳、秋来巳、
二松巳、仙路巳、座柳三、
二有三、白座二、独坐二、
奥眼二、時来一、

山里乃秋らおくをハ篠葉乃風天馬
狩場の人のをとする 籌 雲 奇剛
秋日和篤かとのゑの来て 越来
をへとうこむ月の谷川 久鳥
木のハしをひろハまつる篤うら 涸

柿 ものみなとなみうる 馬
う 鈴くみこれどの泥をうちそそぎ 一鶴
窗のもとしのあらき 灯火 雫
うつうつと鶏をかむ夢をして 馬
又情なきうつ治へ丹出す 游
うら汁よこなのあるし風みうう 雫
とう夜の杉乃をきなうみけ 鶺
あさうつ切うこひーまへ用もなし 鴒
酒商人のうちをなつて 馬
雛のそ北そそなんてゆくつしし 鶺
志こうつくうの永ふさく花 雫
春の尾手の私そのおそうて 馬

末終麦ついて雨ふするそう 鴒

花屋庵せいか

何をといはをの市ふゆく鳥 翁
教雪のひろみそそふ 新栄 奇鴒
すつうつとせひるる北の峯保めて 二蝶
手寄そそのにうをしくう 鴒
いさうもひのおハ禄みてうこそ 蠑
ふての上る下冷ふなる 鴒
ウしば秋ハ笑えてつくるくすりさみ 日
ゆふへを告ぐをのあるまし 蝶

山伏乃笈よりて〻取出な山
笈の葉毎をうけうるく
おそふとくいへ常のあるうちて
一つ〻風風ふくとる 情や
三葉と二葉のるの葉の葉
葉の中一ふさ〻 秋猿
去るをふくろのやう風借名て
葉 なくまゆるゆう浪
秋空よそと名れハ幸の神
名 名取 雪のつけさる こつ
ゆうみ〻る泉を住へき人とみて
若葉なみなの猿をく〻〻

あやめ葺花ハおー〻てるまのう
天晴をまれてくろえへのそち
格のるおなく石を投うけて
よそめつうりて人の袖ひく
杉楼のるお住て窓こそろ
通さくろ〻て伐〻すし
白をハ春のおう霜ふう
五位 ちる人の通るをは
撰の葉を持るおう蜂の角
筈うこみハ私ことふまる
名ウ
招あり〻く刻るの級よ秋空て
小鮒のそ〻の白まる栄

杉 船
杉 杉
乾 乾
日 日
杉 杉
乾 乾

攝州	大坂	尼崎	伊丹	難波	味川	中野	神崎	山本
山城	京、	淀	伏水					
大和	奈良	芝村	五条	高田	櫻井	三輪	高上	八尾
河内	豊浦	枩川	日下	額田	植村	池端		
	四条	六万寺	山田	吉原				
和泉	堺	岸和田						

淀先ハ快をとく京のお茶ひ　ハ
我のかこみの畑つくる花　松
ひつそりと森下り居る鹿の庭　ハ
限のぬるみの雨をもるそら　報

炭俵一句　奇淵九、二蝶八、
二松九、　柔翁九、

鳴戸海雪

浦なみの遥むた治をる盆を深一万とび盆松眺えア
おなけ山よをる潮のゆをゝ南北治を波千よ鳥の梅を
なをるゝやゝ鳴戸のちとなるてゝを松花のさゝり松
とゝふ——とそ

いく潮や鳴戸都まえ妻の浪 奇淵 推蓑 呂雪
ひく治ゝ声うこゝす鳴戸うゝ 徒盆 東何
雲むりや夜み鳴戸の浪の音 無竜 田
鳴戸ゝ——夜半卯花おをてくゝ 呂雪
うちみて海——鳴戸のほゝ——ら 呂雪
山ゝつる音やちるゝ秋の潮 梨雪 十子
すゝきつて鳴戸ゝゝき相うゝ 呂雪

一いきの船よ山うめ鳴戸うゝ 徳盆 冬二

名波

滝羽ゝ滝 三章

滝ゝちや音ゝゝえてちと花すゝれ 滝北 乾湖
ちくゝ持も為す滝の音 奇淵
吉野まて

眼のうきうんうこくや花のうへ 千子 拠養 千仁
ゝゝ——のやんの初もさくらゝもと
ならばやゝちへいでゝしまの草 陵 南崗
吹とるなゝゝむうしの秋の風 黒田 盛堂
つくゝと暗も聞うよすまの鐘 陽川 岡留

行くすゑの波
先祖の墓やそふ祢てきくの花　徳盃　一毋

羈旅

いそなつくそ——時
まうさよ花のあふちて初日ろる　秋夜　久幸
みそふや東雲一里ふんてよき、竹ふ
あんのふをそふ舟をそ故山の
ゆめそなて
ゆくさきも松ふさくやうそくんそ多　奇洲
笠やそうそ——ろ波——き茶そ北　圖留
あそ山をいつるさそもち秋の風　西下　指眠

雑教

風の女もふそる十夜そふ　昊雪

乾坤

正月の気をたなひく春夜か　徳盃　仙文
霞そそ波——さもるおなそく淡　大藤
船うくのよき夜そもれた滝　な八田女　晩梅
妻の日はおそふまなそ山二の中山　梅路
正月も半ーうくる、うすそうふ　徳島　紫古
さそう——て連みそや春のふ、鳴雉
春のそれそふの流るそ北てそ　須ヶ　芸村

名のふむ濁つともつうす実のみ　梅路
実実〳〵さるとも山を花よる　谷松
神略のえ〳〵めや花のちらめ程　無是
名匹社草も苔するにおなる　狂斎　枝角

画讃

昼やすき夜をうらむる七小町　西下　羽角
地本の世よ出るこちや五丁雨　志谷　栄山
筆社竹みちるまてさつまる　千子
五〳〵圖星の灯二つもこゆるなり　西下　仙祖
春んや六月雨の夜のおと　徳島　雨香
いのらんて雨よ歩けり　なるの方　世是
毎日のうるをそ祝て蜂おろく　哥洲

山さの秋化居久へるおいろう哥　指眠
猫老のうへまる秋ぬれ〳〵まれ　羽角
初秋の篇おま〳〵〳〵峰のや　哥洲

詠生

一まくいて秋〳〵神落なる　千化
我五十初て秋の人〳〵〳〵　むや　架凡
す〳〵さもいはこそれ盆の月　西下　鳥谷
老山やおろ〳〵もの下　雨糸
窮〳〵秋の中いきま〳〵　ふの〳〵　西下　木鳥
名なや秋ありのよ栄圏の松　羽青
名自や山係〳〵きす鳴ちう八　鳥谷
名〳〵のそうを寂〳〵なく　詣　哥洲

良夜雨

三五の夜雲なくて秋もくれ九月　千子
朝宮やそのよいとつきくすし西下　芋虫
里の灯のひとりきえくるあきの夜　羽角
よのとをうきもよし永角力とり　昌雲
よくなりて附句もあひめ杉葉掻　徳翁　宝井
附るするどびよろひめ山の泉　雨香
一くるや芽ぶさとく行のあと　角二
松のとや雨雨ふりすす　無量
名の雨人すめるなるうて　盛座
物をおもの古さをすす杉みち　汶水　起石
雲捲の空のはてあるうら雪　桂翁　昌居

人通とて家うち出さの雪　八田　烏秋
我よそふ図両家一ふ沙ふく　一舟
竹の家の穂をおそろ一名の月　新居　松琴
生ま一おりの夜もの名残　千仁
どしの坂油乃の車きしまり　千子

植物

梅咲てうるさうちりめ流し一先　徳島　白酔
梅よ月うらうらうらの夜ふりの雪　菖居
一一き雪梅うるし一つむ夜かな　東何
名の梅　盛座

うるよ梅あらうらうらの雪うらを咲おく松ふれと猶もよそ

よおくるならんとそ思ふ——雪も遥——時めきなんくる——れと初音まつする朝くれ——さるを時をつくりをき初て花をもめ校もおくるゝなるめ陰もたゝき比えそるさゝ来通ひて朝茶も色をすゝ盃あるも声すりさめてら梅営の中よあそふらく宋詰をとるいろ音のうとゝをそ——くゝえやーきくはやさをくりて花るのゝそらひやすらんまのとゝえゝおのおゝ——ゝてゝえとゝおをおのおゝとへ歟

——め

ゝおおゝふも雨とハゝえゝるゝゝ　冬三
ゝ物やむゝあらせる小田の家　枝角

うゝ——ゝまあ——ゝくのやみきゝ　於琴
三方のうゝかゝ——れのる木芽かれ　徳斎雪江
草のアのゆ——さよ先花すれ　長松
筆をきゝよの注をつゝゝゝ　南園
菊の前すゝのゆゝりよりゝ方　枝角

宋坐

白あゝりや撮のトまてつくし　富岡八朔房
初花よるつき初てう作——久れ　大藤
松風のひゝゝりる——初さゝゝ　岡雷
おさゝゝ恋——き人のゝゝりか　長吉
ワ桜咲おゝすれえちゝよゝ　星巌
ゑまてのちりハりゝ——逐さゝれ　大茶

在さくらの花ちる花ちるなり　奇淵
松の花細雨ぬれつつ李雨　西湖
すりかりま池あさめてめぐの名四川葛路
おさくやこゆうるむく山の家　起石
おく山のくさりいろくるつゝ水　一冊
初花や夜深いつる里の雪　全
いろくと日の入山のわくえくる　掉人
朝色のまおもらる花つゝな　枝角
よい色牡うちまくれ々り杜若　子焼
蓮の花のそらふみもひらく梨　袁香
のいあらくしさくあみひら卵　東行
山百合や森乃中一のゝ出　文真

村雨をあつめて一つあやめぐり　松琴
枯梗ぐり花あらまれて秋の草　乾徹
蘭の葉のよ仏一人あらハを法上　普是
薄かと初なそのかり一夜の風　子雄
花色ふかもたくまる山赤らん　南岡
雨の落あらしきゆる赤ゝ卵　西下松谷
ゝさりくる花のくらし葉鶏　乃ぬ墨友
のくり帆のろけくりくり皆庄の菊　子二
すさ乃一杉尾ふき神ゝ家向し　圖南
強くれえたくさあやくな匂ケ李　木鳥
秋菊やせんくんのふの二葉くる　芋虫
白きくの七ろまもまのもくら水　羽角

陰く乃家ゐろもて——住居る風　整髪
初芽や山ハあさ——と指うかす　菖蒲
山姫の衣うへ——てをそろふる　羽衣
ひとつ屋へ色のうとつくろふ葉ぶし　奇瀾
葉をふく人ま客さのこゆるし　仙祖
山風の野——風みこそす高塚ふ　圖弼

生類

鶯のおのく音のこと鳴ゆれ　鳥飛
うめひすゐ声ふるてふ谷そこ——　岡留
あけ侮の中鶯おこすそろつて　奇淡
うすくと霞まろうえれ沈の　雨香

かるくと眠るま給るのかろく　須す　沈必
系杉や給るの夜明ま人の声　徳重　楚東
き——時て茶の木もるうあんまり　千子
暁のそい谷をて時——きこす　栄山
花待てるの菓子出すそや　須栄　秋水
朝るの内を行くつる蛙　弓雄
ひとつ家ゐろみ夜のくる蛙うる　徳斎　子調
姐くうとうまもて——死ぶて、　まま
首ろいてふもひおとすや朝のて、　蛾山
てふくの指す　まるしまる事　投石
吐もれてる新をくつす山路分終　竹泪
蛤もうきを時うや亀千潟　起石

時鳥あとうて夜のふらす　千ま
白をよ待千うふ人許ら　千仁
仕とぎす月のかなの海とる　吉雪
杜宇人を一つめて月松亦　松杉
る紙指赤うさ待る待夜る新宿宮居
墓ふや栄てふひろふうんこる　大麓
る鏡暗北里のるう人もゆし　南岡
風ふかい野花うるほ堂る　記石
えるれ報の月をうつまて上月堂　鳥狭
猫の蝶ふうう投る出ける　み二
ふとうふうの中まうれゆくん文ふ　岡尚
きうふす時千林の蔵の中　栄山

八十翁の書ふるる永てこるう
田みむれる庵とおもへ夜の色
雨の庵るくうふ一時赤る
廉のこる夜を宮うちまし一ふ月
り一本火よつ下り居る千暗一ね
さよちふう嵐八船をき一つふり
あき紀の人うてなくふ田の暗
白梅をそふ人る窓のまるこうん
いせ武者のえてしうふ人祖代吉

雑題

里人のひるもあるふりあふう

人の世も巣つくる蚊帳のゆふべかな　葛飾　白酔

敷鍋のくろきもものちぎり　中宿　巣丈

祝

家々の物音もなし

元朝のそふもゆいてみる稼うる　奥丈

為なうとしこの冬ごもり

ふうふうそこにおくる

杖よきる行うるねやぶをへて　高洲

霞むしま朝凪さびめ夏うすみ　雨香

路のあしうるなぶり黛　一冊

沖こうう物を京のうざうまて　赤何

傳をつつつめらす村る　子雄

訪いきの撰よりふもく祢のく　掉人

山口の茨もすつつりと咲　枝角

大智う寧府まりを送る秋　まき史

日南へよりて祖父を祈いす　雪丘

ころくと拵て久しき昔の歴　冬二

洋の中ま海主とちつしり　香舟

深しさの岡峯おとい京のう

何
於
史
角
人
丘
二

杉原もろり——菓子盆
宗長もろみの西瓜ふるまひ
おもろんとも八搦ふ商売
家並のつらり雀もふくらみ
すつりまけるみり売の
初花のさそもて来るあさ氏
舟逢よ——くる春の小社

ある坊を指いて

主客して木芽つくみり春の雪　千子
有さ——出る梅の山ろも　紫陽

うろくるもり行うる絵時して　景雪
たなしの赤をつい売くり　子化
舟宿よ泊まもろ氏さ——むら　居敬
茶うつみとう売ろ——つる
以宗い不立文字の安永土　子陀
堂あうりよ　はるこつみる　雪
迷ひるをとつ彩てまりくるの　化
芝居くつ彩の両のあひる　敬子
腰のあらくせハ鬚のうひし
養生よある流外の家
えつくよくれても月のよい雪
宝とあとハ彩もうらやむ　仁

敬白
子
たまとつ田右ふ小泊漱
敬白
子
をしめ千かくの花をつくせて
雪
聖の御遊を永きねのさく
化
おもひて実の能くふ下のもの
敬
車よ運ふ栗裙の俵
雪
そそなる笈とくるる旅さて
敬
打こそよれよすてくおく
子
空柁のかのらま羽笑のひろもの
化
ふふうと涙一猫のふの後
敬
跡とうの柱ハ言こ無そ発
雪
易者よかつてあてくる笹

敬白
子
化
敬
雪
化
敬
子
化
敬
雪

筆硯気のつくまで筆をみぬき
志ら菊咲けよ古綿一のみる舟
方これ中風の手ひのたやう分し
おつく岩をくぐくや、寒
雪夜風のてくらといふも五六町
囲舎の人のいつそ仁ある
一枝の花も無益をうすそす
春の日白ふあろう玄玉植仁
うくくく風吹き雨のあゆきて
筆等——きし曙の雨執筆

篠の家はゐ琴もちつゝめ鼾うん 琴居
るめるそうるお有りるのつゝ 琴居
さゝらやうお宝の貧うをりまて 仝
つう那る袖の中よ筒みく 琴
琴ゝゝまてみてるの人ゝなう 仝
餘宝の袋ホ海苔さゞすらん 居
学る一ぱたうり略するし 仝
誰てハ居られめ猴集の 春琴
拵哭の翁もをりみるつゝ 居
う〳〵扱ひ〳〵牛あるよ つゆ 琴
方ひり雲ハみりこむ古 館居
後のよゝういつうよこれん 琴

船まちて浪ゐまおゝむゝ 居
ホの家衣をつる朝く 琴
家きハふこりてゝ〳〵花もうす 居
宝のをもふる ホ〳〵風うく 琴
云月中寒路のる ゝうちゆゝ 居
なうらひくくるそのゝゝ のう〳〵 琴
はゝびハ仁の舎則うゝるゝ 仝
いつまて長くのゝゝ筆とる 居
引ゝむる袖よ油をの油ちり 琴
小松たうりの市ゝゝうし 居
よさゐよふる居へゝる七ホ 琴
写上 の眠 さゝす 山亭 居

大ぢをはなれあはすせとう 頁
麻のさとりも人まろせそ 琴
をそたちまのををみそより 頁
りおをそすそやうの於ろせ 琴
一一きり月みうきとつ景の色 頁
壮日の雛そそ求やうあろ 琴
ち安の人よあはさる二十年 仝
花や巣を猛よ生ハす 琴
うけろ岩み浦舟をつきき指 仝
弦のそろひよろかぎすりつ 頁
弥ろ一妹ろろんいいてえん 仝
とすれをさむるるの庄の年 琴

十三

追加 ちよ八人を伴ひて二夜の
旅み

頁汁そ〳〵音きし〳〵宿の夜そ小東何
森ゝへるろ不み蜱の私音淵
月の秋物の梁もものをくて 仝
でくり船のいつおろすろん 何
古ひの舟後のまハ紡重 仝
ばろいるる茶時ちり皇 淵

阿波　徳島　覚一　撫養　黒田　淺川　新居　西下　富岡
　　中富
淡路　須本　八田　淺野　淺　中山　大谷　掃守　西川

郭ろのあうつまる窮乃ぶへとをうーき泊くをが
き祢て月まつ秋をいよ此玉楊のをうなあそふ嵐角
うーをうおろる竹墻殘暑をーむくいろみとう
たうこれ此のんをろろーいつる

七月十八日

つえをひやつせくる桔梗うる 音渕
鳥も秋うおしうつる声 嵐角
暮の月猪なかれとせつうれて 月渕
松の百の 舟をこるく 渕
いくつある苔忘くのなるくさき 月

[illegible]

おくれ乃あと〳〵捨るたの子 角
桔梗なきみハうるーし朝の瞳 月渕
ちらちらいがーしのせろきやそ 渕
いそくーう烟を吸あふ小海老 角
常るの花の梅檀うさく 渕
あうてハ押よせてくる山のを 角
千弥のたてみとろる 鶏渕
いろくせ茨菰なまふす三日の月 角
人まつみうをくなみうろく 渕
小こーらいくるこの名さへおそろき 角
とるのてまろー。岩谷豆を干す 渕
秋花の木ハみろふのこちろろ 向

おそふあくるより外営の鳴 角
二春のはふ通りあめ―紀恩 侯 洲
竹てもちみし家かめるく 角
木耳を俵よへてうとゥせる 洲
風呂とうさうと雨あを汲 角
杉盃乃貝をそこうおもうて 洲
洞の交るかとうえし 仏
水仙よ人の住まをきく出― 洲
雪ゥふろとそこそこそこそこい 角
汲ついてこんと茶へる 小 洲
戸のあれそこそこあふつ 灯火 角
大うと此月を落よえてしまい 洲

暮のうくるゝ白雪の中― 角
三こゝくと法あの音のうそさき 日
智乃亜段のたらめ完あい 洲
挽の文をこうとせるとしの暮 日
日此出る時よ経のこぼきく 角
吹たるふ花とり風の吹とかし 日
栄する山のを―き春先 洲

八なハヨを洞亭の書屋よのかを
てき人のこせるそのよ歌をて 洒堂
秋風ふふられてあら―多のを
卧てもらう―稲の秋の 汲 汲竹

芭蕉
奇洲
其洲
調洲
洲
調洲
洲
洲

磐うきも秋沼の里をとうねて
一くさのそこの石吹の家
松ふく風あるへくらの小六月
墨ぬりなすいつのつくり
(ウ)居合ぬくおもかりきみるれ
宮の涼きをはごてみる
芝言荒の袖をとさともそまら
猿ふ老の雪ふつて出す
峰のくら盆の憧すもあきらな
人きれいちる秋の下京
我性をついこうちよ椋の月
隊殺うみとふるのなき恵

どんぐりと日よつきまかるをのくせ
筆の中よくらす屋汁桶
牛つゝ垣のあちらの花さうり
(二)爽のこちきちへもおりろま
岩ふみつりとさむ俳笠
千放ふ小泊瀬もハなおくち
池のまゝこのめなハ刈ころ
何こゝを雁をとうて鳴なん
おりふまくらの便ひ一な
番匠うたゝ材ふ又もて
月雪通らめねなうりり

洲
洲
洲
洲
洲
洲
洲
洲
調

あくるまで家をいでゝ住くらめ　龍渕
暮　一ぱよがる　赤馬　洞
むやしと翁あのこるきみのすち　洞
荘の夜――かつて添む秋　飛　就
ニ
うちきれのするハ傾の　砧よて　洞
手――ひろうり留主をまつうり　洞
いくなもゆ砧の翁来とおもへ　就
ついふり初てもハもな夜　雨　洞
やうと船整の花んの形を奠　洞
あくるのうへよりみる蝉のす　就

八月廿二日松洞亭

行鶴整う度るてあり紅なり　白雅
落ふうみ妙弥る　生　吸　松洞
秋の風船のくうふ旅をして　奇洞
陸のふくろも持つるしうり　雅
ときハ本性なるも人のあつまれる　洞
堂の　多き　め五りのそ　洞
うかなれまをふふ昔こうり　雅
いせぐとむとくうへしる　洞
逸すれハ峯のあしのまぐくて　洞
根ふうき関よ物鳴　の声　雅
雪一ら船の陸とならの夜　洞
有乃神泊を旅すしうう　洞

さこそしと芝居のこゝろ秋の朱
めてくゝきてくゝそ狂言の鳥の啼
位のはの朝のゆ―きこそ蓑をけて
ねくゝうの雪ふるまゝの〳〵へ
栄やく〳〵猶のたてもの花のやど
虎杜の梢なる雛をなぐさむる
二三をくゝ双六打のあとくゝふて
松みちれと杉の木をひく
やくゝくゝと待夜の雛よくゝきれし
たゞをこぼよくゝる村雨
いくゝも敵のきりんとうちめる
神楽のあとのくゝう―寒酒

きらめくゝ水仙をくゝすゞ屋の隅
雪のあ―くゝはくゝる窓を
恙くゝるくゝる時ふるまをまて
涌夜のまくゝをくゝみるる
こつくゝと峰をえて入る宵のくゝ
ぬすくゝびくゝる一いろの菊
押拭ふ長き刀のさやの
大欠出て　ふの音きく
袋花はゆるふ人の穂よつまし
くゝふはえかちなてふのくゝこみ
行燈よ美のなみをくゝ
伐らすみ垂た獨活の廣う

九月十四日二夏庵

よくそれと落とハよくいひふるす　禮堂
蛙蜘かくれ出の音もたし　高泓
朝月の門を細目にあけうみて　全
人の白ひねふるふ　堂
香爐よむせてをうーき眉のひろ　全
つい〳〵とゆくくるの蜘蛛　泓
う篠竹の芽をうきざす頃の陰　全
来る　紆　ふたをすくめて　堂
焼塩ふる茶湯の据のふさいく　全
船のへさきみあてる　杜風　泓

おらくと招をそせしるそちう　全
松よ耳　乃ゆつく　方　堂
うへまの忘水の石をいひたち　全
ひら夫のうみするうみする半　襟　湖
破の奥　音のみまてるるして　全
三日外　そぬ春そせりーれ　堂
花すへて花とまるるのをさう　全
人うりゆく　森のまれつみ　泓
二糸丸の里ちうーと伝訊て　大阪琴亭
つみてそみき　籠とう　出す　泓
降そるる面八袖　ももそるる　亭
着のわう系をひいてわうる、　泓

夜寒き宿の板井をむすびあけ　宗因
ふる良の墨衣乃歌ぐるし　同
むくるみるかさ——あてるを枝　同
塵のそりれ——むとひの風　同
寂然うとちろ——るおみな　同
舟後はくるの秋八重よ今宵　同
雪のかくらげの中よりあし　同
串ふさ——くる春のより——火　同
三段琵琶ひきのをひいて出る芝の上　同
くふ雪根よをもとめ寸　同
うこ——と神のひらの笹をとろ　同
梅をりの来る人をかつし　同

秋

つ掃をまをつ秋乃かこと風　宗因
庵ふ立るあるや眼先よ萩　旁朔山　梅宗

七夕

いろ糸やうち——七夕の夜のうき　下島山　岩舟
さし能やよいまちへて杉の宿仁尾　宗徳

浮雲山

稲尾の雲ろり秋なしす浮ろり杉神子　重中

なくてなみだこぼるる　稲流
白雲よりつうの里　くのりこの子、窪汀
柳つかみそばえて時り雨、鳥中村　貫玉
なつるよくくるくるくるり　牧の朝金山　そ樹
いつの間の柳家々　雨雨の声　売宝
　なくの去るをいつくむ
一つ　きやおもへる君も花木槿　宇執岳　素亭
あさがおや一つ一すちのいくすじ　蛇泉
蕎麦や幾日さいてもそよの花　松里
朝のまよまくれてあるう女哀　そ子　燕園
居もよう洞なるみそ子萩のえ　金ひら　古月
白萩よのこらぬ夜のくーき井　そふ　鯉史

かくれのうちや大くく萩の中　梅の口　春城
萩うふ人のくいくくもやど乃萩　しま山　篁照
山里や一つくりあるー言萩の花　小松　霞耕
笛ふいて草刈ーきぬ萩のもち　桜井　佳北
やる里や萩もくくみも萩落　松里
秋芒ふくくんすちりゆく白帆乱白鳥　灌園
朝窗を月夜めうするすゝ武うの今治　楚舟
板くう加のうつるまくまう卵　青湖
窗の夜の風すちくゆる屋花　升水見　岩角
さびーさの一くくりふ屋毛升　劉山　笹峰
てうつるるのうへよ秋のを哀　姫路　里渕
山風のつれなき中やあるの蝉　岩国　島芳

人こめる小夜をつゆくらひかとうをとまる面をの御のお亜
あり〜とて村老そも古庚申と吟ぬる幹まる為〜
られやうて庚申庵ととをこひれる彼五人ようう
ぬ草のいおむすふもくや〜雨ちようせハと詠ふ
ひ〜ほるんふよとへてハるてとよはるかしくれとめろ
よさとやうれる笠垣〜てふ〜舘を澄つき和き流
をいちふふう汀ふとうつ小杉をおえようつしられも
季ろうくれよたつつしく雪のゆふをふをのさひ〜くいく
いと閑ちる就ちりろされくて俤えぬ世をなる〜ひな
俤ろへよもあろねと年経る痴の結ひん神つろ
生今八半ふけて砧いくふとやいふなくあのひ〜松露
の杓もはろひあろす海の中をちなくふ踏てむくふく

卯歳とう土原とちる社外ちられ小速ろ多ふすを体しは
毎よ客居宅社ちる栖をこ這出てるよおとるる〜のあき
をおとすると六亭やおのつとろ風ををな〜記坐
奥るのるよ交まつ遠ふ西山の山気気をやしる
ふよられつも孤村日高てとを烟糸みあろくこちらすや花
見の懐猪我ち囲ふつくまてすへて智密北おなる海ふ
を俤て一時みろのろふ宿山の俤を逐ふとろ生流
のてをハちろ〜くの気ふよ話るとのひ〜ろふるて
ぞろ〜大阪朝市よありとへともちむて猿を抱く
商人ま〜ろむやろ和よ帖名経判をられんと志
きろふ西栖の西方をむさられもいてふちとふ神川
の明ろ和音よとろまあるを得四ふあちるふ窮ふ

めさめてみもやる後のなるあはれあるこむ秋そ壱枚猿
簑くもりてくく列きろ甲斐の石水の長流西よりて
くもちよ今津の浜にはへるまちたのそとは小ろき五月
菅左典厩の墳郭よりてそそそそづくる稚石を錦せ
里そそて鬼太風よ消てふれしく凍る岸をうつて何
をとゐむ金甲投男の我名もそくく萬古の思を
いくなてふるところあるところ吐家しくくも酔
なくすすきろしくるくる柿赤八年の秋のこいく松をて風し
て郭生ろ風流萬ろ菜園そくら炊よそろしくくねと
風流無そてそもふ今日は生非をしらすあるかな
うくねの枕の上よ一弘のくろしひをおめんとすれ雲
後の色蒸るよ彼をて柱ろ風新楷よさそうしく世八

うつくなるあうるしなとおりひはくくるよ十みハみハ
古人の名なのこはそうて益有三なの交も指をおろそ
らす姫ひ冷よ強よ生時てやくひいねくしれふ笠松
くうて主志をつくさんとそへもいつしの眉も遠生
の秋よくれ額を雲にの浪をくみてかる戎坂さ
らよ何をろりふへきくくひハ方三五の完紀をともな
ひて庭の面よ秘細すれ思よところみ外ふあうす無
七ろちうすりうつて一度つひふ強くめふうのうまち
ん未森南睦よ紀楽麻北岡よ秀て耕者牧をの
にようくしをいれのねろきくしと泪さめくこひり
てみろの袖をしおぬ

よしもな紀名をくくれ秋のこ

星しるいくつあるらん秋の夜　探山
なの戸のうちつきよられなの秋、　兼冽
おのづゝみきゝしくるゝうら〳〵、　八就
なよそゝてすごしさむき秋哉、　蘭式
月の夜やあの音ある柿　京、無名
さやさよ栄出すなの夜よ外、藤里
彼のこすれ五本みる森の月、　蘭雪
なよき夜人のゆきゝよ鳴蚊外　無嶋　志中
人さ―なあけくれの小家　京中村　宗山
ひとつ家や窓てふすれも秋のくれ　小林　其調
秋のなの出るまて安えそう　三河　三千雄

なの戸をゝゝみなよちりかゝる　京　名軍
なひとつゆりおさめる時戸哉、　昌七
秋のゝ二潮そゝりて　なの　月吉田　白雅
みるうちよ松のなそそちりかゝる、　菊栖
ひとり哉や秋ともちす　春のくれ　小豆島　無物
鶏呼てあらせしの夜を昇る月　京洌
松一木な夜の骨とちりかゝり　中村　壽
みくれや鳥とびゆくうろの秋　川辺　柏枝
みゝのうえるよ哉ぬ秋の山　三条　吉蓮
門かゞりなはおーよさ秋乃山　七調
くゝぶれもおちり古―秋此夜　机暁
秋の海なられくのうつゝ―支　亜中

あらそひて入ふたり秋の海 大原 魯庵
秋の雲 そのおー よる々ー なか 笹峰
秋の日も なかも終ー 人の中 小堂舎 石渕
いな一つ そてバ夜さを 笑ふ 田布施 松洞
さむー さも夜さむ ふかてなつかり 霞耕
川音のー ごれすくる夜そとり風 今治 國二
秋そ ー 秋みさる 風の音 舎乃 其堂
京を出て 守めもおそ暗るる風 無物
初厂 此八坂 ようつれ西 土佐 ちよ化
暗のゆく へ ふえてふりそふ 松井 尚角
暗そてハ下る音あり 学の中ー 寿渕
夕風のそつとそりて暗そふ 安治 雲竹

なく 麻のせ ー くちりて雨のふる 松室
ふふて八跡を山ちるる麻の壱畝 田辺
麻子のくくり手 園の中方、文耕
麻吟てそれふくふ山ちる、春江
なの風 秋もうつし 麻のあと 小松 孤雲
すつと出て、麻なるふり 小林 竜渓
ふそくく夜をふふする 松洞
里く 此秋をそふする 風かな 青笹峰
古な夜里 雪居士 川内の人
名の中 手をそふ名をそふる
梅てそふひさこのつるのゆりる 寄渕
うすあふえそのてありしくそハのな 北条 丸皐

なくても朝ごとのふりそく花菊 小杉 東津
うつろひ色をたゞれて那覇外 金沢 月指
きくの花香をたぐめる咲こゝろ、 風流
赤菊はさくや夜明の隈なこし、 静岡
白たくやそのよ残れぬ秋のつゆ 川辺 御風
紅くれ花市よ出——てもつゝし 笠原 芝峰
菊ぐもも見ぐもも秋のゆくゆくも 布施
うら枯もありめ富士の山のむら色 三浦 緑山
灯籠うすれて夜よへ——まみちかし、 二木
なごやうんや恒例なごやこりもせず 祈流
后のくるまと菊の中 ふまり 川辺 車就
ゆく秋や人の出てゆくをめる寒 堀内 悟庵

題

うれ杉のちれとちらつて神——れ 墨國
——くる雪有秋久々——紅屋の主色 井堂
ちくれと杉をたゞれぬ——ら孔 雪就
夜時雨ぐ——ぐ降られてやなく鴉 鯉堂
まよか——の日八れてゆくを新井 魯夫
ちけくとるちるちりく——色 小室 橋中
龍時て片そるめ朝——れ礼 二木
玉いくつめりて富士の小夜時雨 竜泉
門の山刈——ら日そ——れ降り 奇洲
はこるを海の小そるを山くり 壽

山里や一花の小春のきく曇　傳蕉
こゝろねてねむりくらべん人ごゝろの山ニテ吟ス　枕星
まばたきもせうてふ一しよるの搖　枕星
山里やよき家つゝて十夜ふね　素亭
うつり花ちひさゝれともさゝうるゝ　ニ沽洒ス
毎日のみをうくねて為家ふね　白雅
柿芦はこゝちもさゝくなり秋　枕暁
芦ふれて柿見の家とまりよふり　元調
旅まれた又すてもすつす柿見花　立
ついでこの庵のおくりよ柿見哉　枕洞
すけくとなも旬ハねうき秋　奇峰
なひくりとふれふかる柿見哉　徹風

ふり一史の小山寺こす柿のふね　書蓮
柿ゝえて雨のもれゆくふれ整ふ　春峨
本ちゝゝゝふみえ新ふ雲の音　宗徳
大まおやつてくれ和のちゝひに　車就
竹ばやをうつけち雪のうつりふ　五粒
雪ふんて田毎り鶏はなく秋外　茂峰
大雪のくゝそふちり秋の月　梗堂
雪の中よ夜のさゝちる山家外　静山
雪ゝ一て柳よのこるあゝ一外　芝峰
ゆきのふやゝふも納ゝう一う就　祈海
竹の雪宿ふる名のおこゝふし　雪中
雪車一つありゝれゆく小坂ふ　寂汀

酒ひさく汲人てうやるを吹風　志光
　無の見
雪仏さゝらめとてて沸る湯て　瀧圃
　有の見
おもおやおろ〳〵志ろぬ粧裏　を
古かな〳〵ゐ柱のふるき次第の家　松枝
鏡を〳〵るおやこゝろ〳〵のふる会　祈流
はるみちるそれも互客のおもり　小祈　文光
春を形の中〳〵よ仏の情表方　松里
空也忌や　ふくべてんるる冬の笑　谷仙
秤ゝゝよ海をのうへとありふり　芭天
さなふてうつゝられてさもお〳〵　松里

衣あうりの尾をふもさゝを祢〳〵ま弁　蕉流
窮をきりぬ夜ふる〳〵〳〵柳史　柳小屋　久弥
岩をた〳〵る音もさゝへふうさの入　石両　一越
　みその梅
探るまよ堂ゝひぬ浪〳〵ゝ　雲山
いなの戸や花もさづるふを　椿　古友
起てみるやうまもゝえて浮森る　松里
あちむらやこゝろおるて有の入　完車
月のくれや味噌つくうへを明の壱　吉川　事会
窮つぶひうゝゝかしれ不ふうを、不及
附るてもし窮堂のゝこつる、京越
を〳〵るおおふ〳〵〳〵き入ね弁、有竹

月まんの海をえやーてゆきうう　白雅
うーろろう鐘に明ちり朝千る　島芽
おそやーくくえて眠るうつーろ吉　福風
ろあいて壮ま里ちふくのり升　馬城
おりやーとおりげよ鮫の尾の帝し　小杉　鳥帖
梅よまて後ろくめよみその蛇　月蕉
やるをよーーつまるゆきんか　桃里
門さーーてやく起てみるゆきか　宝車
手木こるんふ線るいなりりみり　無駒
つう庵のとーーとうおよ松社雪　仝
ーつくやをよそうれて羊の雪　里洞
ゆくーーやふ耳まるる松の尾　三雄

ゆくーー松何よちめく雀ちる　桃里
つねるぬ寄やこんのりとるの鐘　仝
女ーーやあごよくやのくうす　梅宝

春

元日や松尽ちる門のうん　桃里
うるふきふまるるの声うれ　車説
冬の寿ごこでるよれでる松　梅堂
初売の春をむうてひうる
家君の聖をおかふ
元初てうやく山のちよの春　釧山　庸宏
あうるーーと春をる眼よ四なのう　宗徳

ふみちる杉をちひさなるほうきに小林路通
奉老人演

七まの中よりそろひて芹の艸　奇淵
杉竹の門をそろくてうめ此花　里淵
家二軒梅よろ〳〵く芦ひろう　今治禹水
温石よたれて幾日　梅の笔　志光
水と梅うめ祖よくおいをう　福風
毎日のをのよも梅の明うめ　玄調
ひろしく梅ちるみやおおさし　芝峰
白梅ふ夜そろハひろう笠うり　桃洞
作山なや一き出てよ梅柳　立
そのうめ門いるそもや那奈う　白雅

両常一て夜のあけよくき柳外　宝章
三日月をそろかくさすそれ柳　灌圃
き柳の人ゝくれゆく小る外　垣生春良
旅人は戸口そうぬるやるよ外　笠山
き寒ととろ就うつるゝ田外　桃里
笠ゟ一そ夜のぬ等一先　指中
うそひすや志の竹とくむ久あし　宝車
亦するゝ営二ツ留ちらす　青逸
茶旅酒弱うそひすの木百う　里淵
宿ゝりて三日うそ宝日和う　馬城
眼のちゝろそひくものふや雅外　呂仙
を十里すてもき上よひゝり外　御風

窗言うとんでる庵のあ〳〵ル大森 枕の
雪ちら〳〵消るそのしたるの雪 三千椎
春乃雪松〳〵て保つく松ル 枕暁
雪のもりて春もるとり木曽の山 宅車
物午ちる七つるとり松の月 枕星
庵一つ内をるとり雪はそて 千頭
山里や寒き夜〳〵の春の月 壽
夜よま〳〵てどんげよやう哉の月 松星
えるの〳〵ゑちんどちく松ゑル 灌園
哉の月すちらひよ了の通るとり 多紫
原中や雪前 植るはやぬるみ 佳北
山畑中飛吹〳〵えて人うすむ 奇峰

注つく〳〵る乃ゆう〳〵な哉ル 窪汀
そ松てこのむつ〳〵〳〵めそるる ル 無物
世の中のうこき砌り春の風 龜泉
草山や気よう〳〵る哉の雨 素亭
哉の江や船のなちる己う 永古力
あ〳〵そしふはいられてる春の山 貫ゐ
弱いて出れた春の〳〵き ル垣七 欽風
春の夜をよせて山家の客仏ル 魯丈

談禮記

行〳〵や気の齢の〳〵こう〳〵 無峰 巴龍
まよそようつりゆくそちう 惟喬
陳も世て雨夜〳〵哉蛙〳〵気 宅車

なく蛙くらうの夜のうこくたり　白駝
灯くらせいおとくるもの——暮の壱　毛洞
蛤の山家よくゆふへなん　昌夫
うぬもも隣もも前て春のそら　棟宮
山里も垣もみろりすくれ中　橘中
初花ふうちもるくる小家なん　岳扇
ちるてこのるくいやせるそ花のそ　二木
日花よ前てろ——ま　月隻
花ちりてありやなしやの山家ふ　佳北

東都

花ちりふもふて乱る山　松枝
杉風を押えて花のあろ——ふ　蓼宝

家花のくるまもおちてながれり　タキ流　橘平
古巣やゆくえもちる　探　濡圃
腰戸——さらをめぐる日のきた——　探
こがらを探ふ入て夜ぬくり　呂仙
近くれてかくりる家さらふ　呼丸
めつ——う探ふちぶ　植なん　五荘
海棠をそ折れて夏のあしふ　白駝
山吹やるつなくへな木もえす　舵忠
納中——やこ——の家ふ松の色　重中
夜あらしの吹のハ——くり藤の花　馬城
なみふつ口閑く弥生くなん　支託
花ゆくぬそのうへもやふしふ　益峰
　　　　　　　　　　　　　探宝

以春のそのとちうち揚の本　　静山

夜

夜二ねてすそてをぬ衣うへ　　芝峰
裕若て寒をすつをくちかり　　宮車
夕くれをあらし〳〵と宝ぬた矢敷　　手洞
白波の松ふりくれてなをきす　　隠園

禅室にて

有をとへ無とも答へす宗居を　　祈儀
ゑをのあくるやいつも久こ鳥　　雨泉

西上人の文の松をこつねて

うんこるれもとるるこをや牧　　奇淵

かんこるゆけて松の一つく風　　宮車
十日あまりの旅祢——て庵よ
久生八俗のるをやまうう

尚之の百日営老ぬ宮の竹　　静山
まを鶯やう——うき芦よ雨のふる　　春峨
等の戸も内——て字へきる窮風　　白雅
松よて手八よせられきつ矢　　徹園
こる入て暗て変よ——久しの花　　魯文
落る春のをるまみ昔乃老　　車就
虎杖の花やこひ——きるの音　　佳北
舟よせてみ祢井戸や花　蘇　　志中
夜菊よ営まうやぶの家　　鯉史

南天の花の名ハある身夜名　無物
夫志ハ――雨そぶ松のそのそ外　圭亭
石の出る山とそ云ぬけうたの　松扶
若葉する里やない木ハなりより　播中
己かた――て言い山とハちりそ色　嵐角
麻畑よりくる飛ありる木立　松星
磯山やみよりみさる木もち九の庵山　五粒
降さくり眠さくりとる木さも　奇洞
凡つくる家よりてる木立　島芽
傘もて行てあるちりなこち　岐山
麦秋や浮世よ法き雲のみる　春良
責よ出ておゆへハをーき菖蒲外

よ　廿二

端午

菜つるあ――と我子のん――ち外　志中
竹拙て夜のんをはくりより　寛後
五月雨やそよ――く――き岡の松　寺の峰
さくられの雫をうちるみこなるより　昌天
　出ての滴よて
夜籠の屋上そる――大悪客　芦舟
いつくろと涼――雷居の屋のな　馬城
むくの木よこのるやるのタ烟　無物
油乃すれハ我を放るるの飛　白雅
蜘蛛や空の末下をいくタ　御飛
我よりもろ――こくすめり蛇午　李蓮

よこやこさるもかくる雨のそ　二木
何の木よ夜ハ――のふくんるの蜂　雀汁
うちとけて鳴や大木のせその声　三千堆
人久ハあるまあるなりまそ　薄　寛猿
朝風のとこみ匂ふも並の花　奇淵
細の浦
盃ろなもくくる墓ありあその浦　仝
――て烟やはふさめやすた色散ろ　呂仙
六なや　釵そる先よ女の出る　松川
ふるくも流当てまくり乙女川　吼丸
拙作
大塔の光もいてくそやの時　其誰

まそ東風のすそろふてまる門田水　拙里
くる――ろまて
弱舟の糸くる――ろやそのろ　若舟
砂川や暗ろまくるそろ月　櫻堂
祇さへ――まくぬそのな夜ろ　松里
そのな赤てさへくくぬおちくり　月漿
あくれさをおりふるもの――そのな　嵐角
夏ぬろ、そ一たいの桜ろ　壽
涼――さろ表ありくりそのな　志光
盃をくそまよ涼――流――弱川江　梧風
世ふあくぬあく――やねの下涼　貫玄
松分のくふよこうるやタすそ　宝車

京御堂　奇淵
雪仏も清めもすゝ——京丸堂
象頭山　今
峰と舟の百々浦——象頭山
みの浜　今
すゝ——ちよなれて来啼鳥ゝね
五百ら木ゝらの岸ゑよ　今
浦——さや岡よるるの一めぐり
うてゆの流　今
舟々をうつや臺の浦楽し　芦舟
くすの木八つもすゝ——や道の指　まゆ
女ゑの人ゑ——ゝゑきあてゑ外　福風

冷まをおの　ゑおゑてみのきす　宗徳
人よよき飛のくし浦　桜川　松里
汀々よゆくゑのゑてみゑぎ外　奇淵

五月十五日西庵無行
山の夜のふらきすゑ　部ゑ　五粒
ゑの葉さゑゑのぱの不自由　奇淵
二粒のさゑ——殘ゑと庵ゑ——て　貫之
さゑゑの雫一粒ゑゑる日のゑれ　粒
初ゑゑれいやうゑる雨ゑの舟　淵
笠ゑのゑみの面く　虚　歌

志ろみはおりひろみるき略のこつ　粒　淵
ちこうる粒珠をつゐくらねーさ　至
初雨のめてこるよ八こまこ出て　至
杉風乃夜よもれて風ひく　粒
森のこえこうちうー村ーれ　淵
淵よまこさしと舟さしをとす　至
伺てこを出彼杉ーちつけて　粒
こちをなちの春のよくま　淵
ち上る秋おちちし　細の花　至
やうと棕ようつる鶯の子　粒
一門の粒をうさねる小盃　淵
有衣とれい舟のなのめき　至

五月七日霞葦魯り　松里
ゑの海一こうはくのあーー外　高淵
こことうりよ涼　舟　こく　日
よ雅　凡のまらごをみよまて　日
雲のきれ乃の九山　乃　方　至
あとさきは雨よつけるをもな　日
実をするうみよ居るハ蛙蛸　淵
どつこうと鳴おろーこうつのは　日
東籬　ナ　そるのゆはする　里
かるうきよるふのは和をとろこを　日
掌のまをとくさんよ　南　淵

えつ〳〵き孫仕まいづる神せてる日
おそひの翁る。小松一本里
敦賀も雨もちうみな秋しそて日
艘のむ〳〵翁をらふ七る渕
此泉をなおをもてハあらぬし日
人さへまれハあ羽てゆく日
花るの中〳〵をぐつて春の旅日
主生をゐ仏の長京をくう渕
焼物な船を洽せる旅まそ日
笑の能成さそ〳〵そよ里
ねよの木の葉をいろけそ五つる渕
性そ干そ笑のみそすると

神せそのまのそこゐる笑こそろ渕
丸敷〳〵るをぬるく里
之之そ世ハ三里そうの干沼し日
伐〳〵ふす木よすそ〳〵すとも渕
つう孫い笑ふめて〳〵ま敦ろ午里
笑よう午〳〵罠よ入お渕
汗庭雫分のうゐよ嵐て〳〵ん里
いく〳〵ばうぬあぐる指山渕
神〳〵ますあとハ成肉の小まそ日
そそさ〳〵いぶまハさの〳〵ま里
川越て大きの猪の写えう日
社るよ出る人のそう〳〵渕

てふれ——き花をまちあ雪は
寿の光も御徽のうへに

五月廿七日今田社渡唐す
可交
四のものこころを浪すさつきあ
め路うくるゝ四ツの倫奇洲
浮うさ杜馬侍もそろふうん
をまちそう——てよきこ在おし唐帝
沸くるよくやふねのきよちうる河岳
あを畏畏の神き秋風蘭山
へつくうと稼をそゑんぬきうくす古方
在祥のうちハ梅の花のさく 秘流

六月朔日北亀玄岡楊魯行

西面よ吉色なるめてすゝみ外 亭洲
待ハおそ——やう——う坂のく 玉甫
風すち小林の古木のくふきて 鹿山
聖する名の下をくなつるし 杜栗
ととくしと特のまとうの小屋ふ 雲塘
ぬ初てう当——実神——れ得 玄岡
在やうんをりてよくしとはりて 玉江
まちの筆屋のひとつ春くち 亀牧
ほまちの山の小ちをんよ児里 三無

讃岐　高松　丸亀　姫濱　仁尾　靈雞　板井　白鳥　小豆島

伊豫　松山　津田　笠居　大麻

中村　三島　今治　小松　宇和嶋　銅山　島山　下嶋山　松神子

小林　三津濱　藤原　樋口　氷見　蕪崎　鳥生　川ノ江

壬生川　多喜濱　吉田　土居　波止濱　周布　北条　垣生

石田